
流血の終焉

深月姫季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流血の終焉

【Nコード】

N3444C

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

組織対コナン達。さまざまな想いが交錯し、思いもよらぬ結末を迎える物語。ベルモットの意外な過去、哀との繋がり、そしてコナンの選んだ結末とは…？ベルモットは良い人設定。ただ今修正中。

FILE・1 昼下がりの告白

「なあ、お前はそれで満足か」

強張った顔を更に引きつらせ、色黒の少年は目の前でコーヒークップに口付けているライバルを睨み付けた。

「ああ」

さも当然の事であるかのように、彼は短い返答を告げる。しかし、目を伏せたその態度から、平次には彼の“迷い”を束の間窺い知ることが出来た。出会って半年足らずの関係だが、共通点の多いこの少年に、かなりの親しみを感じている事も事実だ。

平日の喫茶店。高校生と小学生がコーヒークップを啜りながら、対等に会話をしている。はたから見れば、どう映るんやろか。親戚、兄弟？でもどう推理しても、探偵やとは思わんやろな。そんな事を頭の片隅で感じつつ、少年は乱暴にコーヒークップを取り上げた。

一度、口を付け、冷めかけたブラックのあまりの不味さに顔をしかめる。母親が入れるものとは比べものにならない。まさにこういうものを月とスッポンというのだろう。

チラリと向かい側に座った好敵手を見る。見た目は違うが、同い年の少年とって、途轍もなく大きな事件があった事を知ったのは、事件の翌日のマスメディア。それにより、大きな犠牲を払った事を知ったのは、ほんの二、三日前、彼から電話をもらったときだった。苦々しい思いを胸に、少年―西の名探偵服部平次は暫し沈黙してい

た。

互いが、相手の出方を伺うように。

「……俺は、間違ってるか？ 服部」

思いつめた様に、コナンが言う。平次は言葉に窮して、姿勢を正して目を閉じた。

正しいにしろ、間違っているにしろ、キレイ事なら言うのは容易い。しかし、キレイ事を言う事で、この悲運の好敵手との関係を、薄っぺらいものにしてしまいたくはなかった。

「悪い。こんな事、答えようが無いよな。自分だってこの選択が正しいのかどうかわかんねーんだ」

自嘲気味に唇を歪め、力なく俯いたその小学生に、平次は言葉を選びながら話した。

「正直お前の選択は間違つとる、と思うで」

平次の一言に、コナンは肩を震わせる。平次は少し間をおいた後、唇の端を緩めた。

「ただ、俺がお前の立場やったら、やっぱり今の工藤と同じ選択したやろな。彼女を一番傷つけんようにするには、それしかなかったんや。たとえば他の人を傷つけてでも、男には選ばなアカン道があるんとちゃうか。ねえちゃんはどうちに転んでも傷つくかもしれん、

でも、それは俺らにはどうしようもないこつちゃ」

話しながら、ガラス張りの窓の外を見る近くの高校の制服を着た少女達が笑いながら歩いているのを見て、平次の胸が痛んだ。

「全く傷つけずにすむなんて都合のいい選択はない。まだ俺はあいつの元へは戻れない。それがわかった時点で、この姿のままあの探偵事務所の世話になるのは反則さ。あいつは如何しても江戸川コナに工藤新一の影を重ね続ける。だから俺は」

「お前の気持ちの行き場はどうなるんや。なあ、工藤。お前も被害者なんやで」

そう、誰が見たって解ることだ。全ての苦しみを一人で被る必要は無い筈だ。

「どうしようもねーさ。俺が蘭の傍に居れば、蘭はこれからコナと新一をダブらせて、一喜一憂するんだ。蘭の苦しむ顔、見てるこっちも辛いんだぜ。だから、今はこれが最良の選択なんだ。俺にとっても」

まるで自分に言い聞かせるような、弱々しい声。

平次は心の中でため息をついた。探偵として、いくつもの難しい事件を解き明かす事は出来ても、人間としてはまだまだ未熟だと思いき知らされる。

「俺には力になれることはないんやな」

ただ、一言だけ、念を押すようにコナンの瞳を覗き込みながら言う。コナンはゆっくりと顔を上げ、しっかりと頷いた。

「…ああ」

「まあ、いつでも俺には会いにこいや。お前の秘密を知つとる、数少ない一人なんやしな、工藤」

重苦しい雰囲気はどこかへ追いやるように、平次はちよつと明るく言った。

しかし、コナンの顔が曇る。少しの間を置いて、コナンは手に持っていたカップを降ろした。床と擦れ合って小さく音を立てる。

「服部。もし、しばらくこっちに滞在できるなら蘭を護る為に、俺の力になってくれねーか？今オレがあいつに近づくのは危ねえから」

その顔と、トーンの低い声に平次は眉をひそめた。何か、頭の奥の方で嫌な予感がする。

「何や、言ってみ」

かなりの勇気が必要とすると見える。コナンの顔は、冷房が効いている喫茶室の中でも汗が伝っていた。

「まずはあの日の事を知って欲しいから、お前には話しておく。…

「最初の事件で、俺はジンを捕まえることは出来なかった」

平次にその意図はわからなかったが、数日前に起きた、大惨事を、
ゆつくりとコナンは語り始めた。

FILE・2 与えられた試練

ようやく、黒の組織を追い詰めた！！

コナンは興奮し、胸を上下させながら、同行していた灰原の腕を掴み、大きな柱の陰に隠した。他の入り口から、FBIの面々も進入しているはずだ。危険な場所にもかかわらず心が躍るのは、念願だった敵の本拠地に足を踏み入れたせいだろう。高鳴る鼓動に沈めと命じるように、拳骨で胸を二度小突いた。

「灰原、ここで待ってろ。奴らが居ないかどうか先に一通り見てくる」

「あ、工藤くん！」

悪いな、灰原。お前を連れて行くワケには行かねーんだ、と心の中で謝り、哀の声を背中にも、コナンは足音を立てないように気をつけ、そのビルの階段を駆け下りた。元々、哀を連れていくつもりは微塵も無かった。しかし本人のほぼ強引な希望で、渋々ながら、同行させざるを得なかったのだ。

だがここからは、何があっても通させない。コナンは階段の傍にある重い鉄製の防火扉を力いっぱい閉めた。大きな音が鳴り響いたと同時にロックを掛ける。他の出入り口も、FBIが何らかの措置で封じているはずだ。これで哀は前には進めなくなった。

直ぐにパタパタと足音が聞こえ、激しく扉を叩く音が響いた。

「工藤くん、何してるの！？開けなさい！」

反響した声を二重に轟かせながら、哀の叫びが耳に届く。

「ここから先は危険だ、何が待ってるかわからねえ！灰原は来るな、足手纏いになる。帰ってろ！」

冷たい言葉を浴びせかけると、微かに啜り泣きの声が聞こえ、コナンの胸は痛んだ。しかし、立ち止まっている暇は無い。今の防火扉の音と、この声で、きっと奴らに気付かれたに違いない。

「直ぐにここから離れろ、灰原！いいな！」

灰原が早くこの場を離れる事を祈りながら心の中で手を合わせ、コナンはただがむしゃらに走った。

「畜生…どこだ、どこに薬の手がかりが？」

辺りに気を払い片っ端から部屋の中に入り、それらしいパソコンを探索する。奇妙な事に、一階はどの部屋にも窓が無く、蛍光灯の光が頼りなさに揺れている。

遠くで慌しい話し声が聞こえ、コナンはあわてて明かりを切った。部屋を出ると、案の定数人の足音が聞こえ、じっと扉の陰に隠れて奴らをやり過ごす。壁に張り付いて息を整えた。中でも凍りつくほど冷たかった声、そして姿を見ずともわかる、刺すようなオーラ。ジンが側にいる、相当厄介な事だ。

そして、極力騒音と人気を避けながら書庫のような一部屋に入ったとき、背後で突然人の気配がした。

「そこを動くな」

低く、押し殺した声。背中に何か硬いものが押し付けられたのを感じる。背筋を一筋、汗が流れた。

「ガキがよく一人でここまで来れた、と言いたい所だが、一人じゃないみたいだな。……FBIと一緒に。何者だお前は」

痺れるような、痛いほど息苦しい視線。恐ろしいほど強い殺気だ。鳥肌が立つ。相手の正体を知るのは造作もなかった。夢にまで見た男。執拗に宮野志保を探していた危険な男。そして、宮野明美を利用して殺し、逃げれば自分をこんな姿にした張本人。コナンのこめかみを、汗が伝い、コナンは上着の裾でそれを拭いながら、ジンの射るような目を睨み返してみせた。

「……………Need not to know」

長いとも言える沈黙の後はずきりした声で拒絶する。この男に知られるわけには行かないのだ。せめて、灰原が遠くへ逃げるまでは。

「言つつもりはない、か。せいぜいあの世でいい夢でも見るんだな」

ジンの手の銃が、コナンのこめかみまで持ち上げられる。

殺される――

そう思ったとき、ゆっくりと扉が開いた。扉が開くより一瞬前に、

ジンの気が逸れたのに気付き、コナンは感服した。

「ベルモット、何の用だ」

ドアの入り口に腕組みをして立っていたのは、表向きは外国の女優、クリス・ヴィンヤード。コードネーム「ベルモット」。そして、もう一つの顔はそのクリスの母親、シャロンでもある。そう、彼女はある理由により二役を演じていたのだ。以前FBIから聞いた、指紋の話で確証を持った推測。

銃を向けられてるコナンを見ても顔色も変えず、彼女は平然とジーンに告げた。

「『あの方』に頼まれたのよ。侵入した少年を連れて来い、ってね。どうやらその子のことみたいじゃない？ 丁重にもてなさなくちゃね」

ジンは苦々しげに銃口を下ろした。気分を害されたというように舌打ちする。

「もう少しで殺す所だった。……さっさと行け。死期が少し延びたに過ぎん。ほんの少し、な。鼠どもにも言っておけ」

含みのある口調でそう言い不機嫌そうに鼻を鳴らすジンを宥めるように、ベルモットは肩を竦めてみせた。

ベルモットは、コナンを助けてくれたのか。明らかに黒ずくめの仲間のボスが、小学生に会いたがるなどは考えられない。そう考えながら、コナンは胸を撫で下ろした。とにかく、窮地は脱したの

だ。

ジンが入り口を顎でしゃくると、コナンはジンの動向を注意深く見つっ、ベルモットの方へと歩いていった。

「さあ、来なさい」

強く腕を掴まれ、顔を歪める。後ろからは冷たい視線が刺すように注がれているのがわかった。出て行つてドアを閉めるとき、ジンが物凄い形相で睨みつけているのが見え、コナンはベルモットに感謝した。

「なあ、助かったぜベルモット、どうしてあんたが俺を助けてくれるんだ？」

早足で更に奥に進んでいくベルモットに、コナンが訊ねた。

「助ける？」

「ああ、てめーらのボスが俺を呼んでるなんて、嘘だろ？ 第一何処の組織のドンが、俺みたいな小学生を呼ぶんだよ、どうせジンに嘘ついてくれたんだろ。通り魔事件に恩を感じて」

「残念ね、外れよ。Cool guy いいえ、工藤新一。聞いてたわ。信じられなかったからしばらく私自らが調査したけれど……」

長い髪を振り払った、余裕綽々なベルモットの態度。その艶っぽい女から出た言葉にコナンは大きく目を見開いた。その言葉の意味を考え胸が激しく打つのを、必死で悟られないようにする。ベルモ

ツトが自分の正体に気づいているだろうことは想定内だった。自分の母であり、シャロンの旧友である有希子によって、自分の幼い頃、つまりコナンの姿の写真を見せられていてもおかしくはない。だが、一言がコナンの思考力を停止させた。

「聞いてた、だと？」

「……驚いた？この先に答えがあるわ。知りたいのなら入るのね」

立ち止まったベルモットは、白い扉の前で、コナンに入るように促した。

” 答え ”

何の答えだ。何故ベルモットは俺の正体を知っているんだ。石になる魔法でもかけられたかのように重い身体。

「答え？一体何の……」

辛うじて出た声はしわがれて、喉はカラカラに乾いていた。知りたい。しかし、嫌な予感が頭を過る。

「入れば判る事よ……………Cool guy」

付け足しのように呼び掛けられた言葉は高飛車な彼女からは想像できなかったことなく静かで優しかった。一種の仲間意識が湧き出し、コナンは少し落ち着きを取り戻した。

「道案内ありがとう、ベルモット」

ベルモットは、穏やかに微笑むと、ある”物”を持たせて踵を返した。

「使うかどうかは、自分で決めなさい。私が今あなたと行けば、有希子を悲しませる結果になるから、さようなら。Good luck」

コナンの手に、ずっしりと重い感触が残された。それを、何の躊躇いもなくズボンのポケットに仕舞った。

”有希子”

ベルモットが紡いだその名前から、コナンの頭には、既に、黒幕の正体が浮かんでいた。きっと、今の自分は顔面蒼白に違いない。考える事を、意識的に拒否していた人物。考えなくなかった人物。

運命の扉を、開く。

ゆっくりとドアノブに手をかける。

ノックなど、他人行儀な事はしない。

外れている、こんな推理。ギョツと目を閉じて深呼吸した後ドア

をに手をかける。恐る恐るその手首をひねった時―そこに広がっていたのは、大きな窓、そして革張りの椅子、大理石の机。革張りの椅子は、コナンに背中を向けていた。

どうしようか。

一瞬、とても帰りたい気持ちになった。今は未だ、知りたくない。いや、これを現実のこととしてしまいたくは無かった。今この瞬間、夢だと誰かが目覚めさせてくれればいい。そう考え、一向に起こされない夢を呪った。

その時―革張りの椅子が、くるつと百八十度回転した。

「まさか……………何で!!」

FILE・3 漆黒の烏の正体

振り向いたのは――

「な、ん、で……」

唇を、強く噛んだ。震えるほど強く握った手は、爪が皮膚に食い込み、紫色に変色するほどだった。回転椅子に腰をかけ振り向いた、中年で黒ぶち眼鏡をかけた髭の男は見覚えのある様相。然し、それも当然のこと。

自分の推理好きのきっかけを作り、自分に探偵術を教えた人物。自分を教え、導いてきた父、工藤優作だったのだ。

それ以上言葉を発しようとしても、喉の奥で何かが邪魔して声が出ない。

「お前にしては、遅かったじゃないか」

机に肘を突き、手を組んで平然と話す男。まるで、ゲームを素早くクリアした息子を誉めるようなニユアンスを含み、微笑を浮かべた男を、コナンは凝視した。もはやどんな言葉も、言葉にならなかった。

「何で……父さんがここにいるんだよ。今頃アメリカに」

いるはずじゃ、なかったのかよ……答えが返ってくるのが怖くて、最後まで言えない。乾いてしわがれた声は、大きな動揺を相手に伝えていた。

「答えるよ、父さん!!」

喚き散らす息子に、優作は困惑の表情を浮かべた。

「何だ、何も聞いていないのか。」彼”から―てつきり、この場所を”彼”から聞き出したのかと思っていたが」

腑に落ちないと言わんばかりに呟いた一言に、コナンは妙な引っ掛かりを覚えた。

「”彼”？」

「お前の事をいつも見ていた。”彼”はずっとお前の一挙手一動作を報告してくれていたよ。おかげでこちらも先手を打って、真実に辿り着かせないようにすることが出来た。しかし、今度ばかりは出し抜かれたようだな」

優作は深く身を沈めた椅子から腰を上げ、大きな窓のシャッターを降ろし、大きく肩を上下させている息子に直面した。動揺と失望で、普段の落ち着き払った態度を覆っている息子とは対照的に、男の態度は、冷静、且つ沈着だった。男が淡々と抑揚の無い口調で話すのを聞きながら、コナンは一生懸命頭を回転させようと努力する。

「FBIがまさか此処まで早く嗅ぎ付けて来るとは予想外だった。少し、彼らを甘く見ていたかもしれない。……まったく、スパイにも気が付かないとは、情けない話だ」

恐らく、潜入捜査をしていたCIAの諜報員、水無怜奈のことだろう。彼女が知らせてくれた情報は、確かに、FBIをはじめ、警察関係者が組織の内情を知る事に大いに役立っていた。

ほとんど上の空で、”彼”の存在について思考を巡らす。

―常に俺の傍にいた人物、性別は男。

「こちらも、”彼”を通じて、お前から流れるFBIの情報などを入手していたからフェアと言えばフェアか」

男は髭に手を遣って、独り言のように呟く。

「俺から、流れる情報……だと？」

その言葉を聞いて、何人かいた可能性が、全て消えた。ある一人

を除いては。

「は、か、せ、が？」

咄嗟に口をついて出てきた平坦な言葉。最初の時点では、傍に居た男として、三人の顔を思い出していた。居候させてもらっている毛利探偵。よく関わっている事件で、世話になっている高木刑事。工藤新一の隣人であり、様々な秘密を共有していた阿笠博士。FBIとコナンのつながりを知っている時点で、先の二人は可能性から除外しなければならない。残るのは、灰原の正体も、コナンの正体も、一連の出来事に精通している人物―阿笠博士しかないじゃないか。

コナンの表情から、僅かに残っていた怒りも消えた。

残されたのは、絶望でもない、悲しみでもない、ただの虚無感。全幅の信頼を寄せていた、と言っても過言ではない。そんな二人に自分は裏切られた。

コナンの心が、ひび割れた。まるで、感情が欠落したように。奈落の底を、手探りで歩いていくように。突如、光が消失してしまった月のように。

FILE・4 明かされる真実

「その辺の話は、あらかた赤井とか言う人に聞いたで。あの頭の切れる兄ちゃんも、ドアの外で聞き耳立てとったんやろ？」

話を聞いているうちにだんだんと前のめりになっていった平次は、もう一度深く椅子に座りなおした。

「ああ、まあ、聞けよ。そこで終わった訳じゃないんだ。俺は、組織のことを全て話してもらう為に、あの男を問い詰めた――」

苦々しげな言い方と、実の父親を『あの男』と言い切ったその顔は、決して清清しいとは言えない物だった。

「まさか、ずっと追ってきた犯罪組織の核に、自分の親父が居るなんてな」

両手を握ったり開いたりしながら、コナンはじつと何かを考えているように俯いていた。目の前に居る親友の胸の痛みを思いやり、平次は顔を歪めた。こればかりは知恵を貸す事も何の意味を成さない。自分で何とかするしかないのだ。平次の視線に気付いたコナンは、顔を上げた。

「そんな顔するなって。俺は、もう真実を受け入れてっからさ。最初はさすがにかなり動揺してたけどな」

無理している事は一見してわかる。だが平次は強がるコナンの意思を尊重し、ただ黙って肯く。

「わざわざ東京まで出てきてもらって悪いな。平日だし、学校までサボらせちゃって」

「何言うтонねん。学校よりも大事な事やろ！見損なうな、ボケ。…それに、新聞でニュース見てから気になったんや。携帯も音信不通やったしな」

平次はテーブルに置かれた焼け焦げた電話を指差した。

「あん時の、爆発でやられたんやろ？」

「話の続き、してもいいか？」

「…もちろんや」

平次はコーヒーをブラックで飲み干した。ゆっくりと皿の上にカップが触れ、小さな力チャリという音を立てた。

FILE・5 決別の時

何かが壊れる音。それが、どんな音だったかはもう覚えていない。壊れたのは、そう、音を立てて崩れたのは目に見えるものではなかった。信頼とか、自信とか、きつとそんなものだったのだろう。漠然とした……欠落した感情。

黒いソファに座るように勧められたコナンは、言われるがままに虚ろな目で腰を下ろした。ポケットの中で硬いものが太腿の辺りに触れ、コナンは先ほどベルモットに渡された物を思い出していた。

何の為に、彼女はこれをくれたのか。そんな事さえ、今は考える余裕は無い。

上目遣いで敵の様子を見ながら、コナンは黙ったまま向こうが口を開くのを待った。

「新一、何があっても博士を恨んではいけないよ。彼は今までお前が信じていたように、人柄のいい人だ」

最初に、言い聞かせるように言った言葉は、自分が何故組織に関わるようになったか、そもそも何故此处に居るのか、と言う事とは無縁な言葉だった。もしも言い訳めいた事を言えば、この、今までには密かに尊敬の眼差しで見えていた父親を、軽蔑出来たのかもしれない。

「博士はずっと私に罪悪感を感じていたんだ。私が裏の世界へ入ったきっかけが、少なからず彼と繋がっていた為に」

「何だよそれは」

コナンの瞳から、虚ろな色が消えうせ、怒りの炎が見え隠れした。

「そもそも、何で父さんが犯罪の巣窟みたいな組織にいるんだ！俺を殺そうとしたり…どうしてAPTXを開発させたんだ！協力的な態度は、全部見せかけだったのかよ…」

心に開いた傷口から、血の如く、言葉が溢れて流れる。優作は、じつと身じろぎもせず、何かを躊躇っているようだった。

「お前を殺そうとしたのは、ジンの独断だ。第一、取引現場を見られたと言う偶然の産物だった。あの時、お前が小さくなったと博士から報告を受けたときには本当に驚いた…だが解毒剤を作れるのは彼女しかない」

「話してくれよ、父さん」

その一言で、言いたい事は伝わったようだった。優作は座りなおしゆっくりと口を開く。余裕のある父親とは対照的にコナンは一度、深呼吸して気分を落ち着けた。

「小説家として売れ始めて三年目、私は長いスランプに悩まされた。

話の構想は浮かんできても、トリックが浮かばない。しかし、読者をあつと言わせるような仕掛けを作れたかった。博士に相談した時に自分よりも物理や化学方面に長けている人物がいる、と紹介されたのが彼だった。そちらの方面では有名だった科学者、宮野厚司だ」

過去を懐かしむような穏やかな瞳は、闇に染められた男を一瞬だけ無防備に光らせた。

予想外の名前に一瞬戸惑った。いつか灰原に死んだと聞かされた、彼女の父親の名前。コナンの背中を、嫌な汗が伝う。

「そしてその内に、彼の自宅の研究所で、様々なトリックを考えたり、私も知らない知識を教わったりして、懇意にするようになった。時には有希子―母さんも連れて、家族ぐるみでね。そしてしばらくして、宮野が作った小さな研究グループに参加するようになった」

「研究グループ？　それが、組織の前身か」

「そうだ。もちろん、母さんは裏の顔は知らない。その研究グループを、宮野は『パンドラ』と名付けた」

「開けてはいけない、禁断の箱…？」

優作は小さく首を振った。

「我々は”思いがけない災いの根源”と言う意味で使っていた。科学は時に凶器になる。それを忘れない為にもな。宮野を始めとする科学班、宮野の細君・エレーナが指揮する薬学班。優秀な人材が揃っていたし、それぞれがプライドの元に競い合って、新種の薬やウイルスを開発した。それが次第に、犯罪を増幅させてしまうと知らずに」

常識を遥かに超える技術を手にしたとき、多くの場合、人間は闇に手を染める。きつと、優秀であり、科学の力を良く知っている彼らとて例外ではなかったのだろう。

「それから段々研究所に人が集まるようになった。本拠地を此処に移し様々なチームを作り上げて間も無く、宮野の細君が不慮の事故で亡くなった。そして、二年前、宮野は死んだ」

曇った優作の顔を見ながら、コナンは心の中で途方に暮れる。灰原にとっては最悪な結末だ。何しろ、両親が黒幕だったのだ。

「私の小説はまた売れ始め、一作一作がベストセラーとして世間を騒がせた。昔の栄光を取り戻すことができた――」

ほのかに微笑を浮かべ、恍惚の表情で言葉を噛み締めている父親にコナンは苛立ちを隠せなかった。いや、隠そうともしなかった。

「所詮、人の犠牲の上に成り立った三文小説、ってワケか」

優作の表情がガラリと変わる。

「違う！私のせいじゃない。あれは、全てジンたちが勝手にやったことだ。もう、私が止められないほどに、組織は巨大化してしまった。…今更、私にどうしろというんだね、新一。そう、私は、私は悪くない、悪くないんだ」

自己弁護を繰り返す父親に落胆する。自分が小さな頃から見てきた背中の中にこんな醜い男の顔があったとは。

頭を抱え、首を振り続ける苦悶に歪んだ男の姿は、もはや冷静沈着、頼もしい父親の姿とは似ても似つかなかった。

「母さんは、この事を知っているのか？」

「ああ…有希子には深入りさせていないが、恐らく気付いているだろうっな」

「ハッ…俺は両親に騙されていたってワケだ。ハハハ…」

自嘲気味に笑えた自分が悲しかった。これ以上この場所に居る必要は無い。コナンはソファから立ち上がり、もう一度、黒幕に視線を向けた。

「…最後に一つだけ。A P T X 4 8 6 9 のデータは何処にある？」

既に親子の関係ではなく、犯罪者を問い詰める探偵として、厳しい態度を露わにした息子に優作は力無く首を振った。

「ジンが何処かに隠してしまった。私にはもう、どうする事も出来ない」

深く皺が刻み込まれた眉間に、コナンは絶望した。

「そうか……………じゃあな」

……………父さん。

沈黙の末その言葉を飲み込んで、コナンは早足でその部屋を後にした。最期に、父がどんな顔をしていたのかは、後になっても解ることは無かった。

FILE・6 進み、すべきこと

「コナンくん、大丈夫？ 顔色が悪いけど……この部屋に、誰か居るの？」

コナンは後ろ手にドアを閉めて、慌てて探し物だと弁明した。ジヨディは少し不審そうに眉をしかめたが上着の中、拳銃へと伸びた手を抜く。もし、黒幕が中に居るとじかに知ったら、きっと彼女は威嚇射撃でもするつもりだったのだろう。

「事情があるのね？ 今はそつとしておいてあげる」

苦笑いしながら見逃してくれた彼女にコナンは一礼した。

自分は、何故庇ってしまったのか。コナンは、少し俯いた。大事なときに感情を捨てきれない自分に少しばかり嫌悪を抱く。

「先生は、どうして此处に？」

わざとらしく話を変える。ジヨディはコナンの異変に気付いた様子もなく、険しい表情で、螺旋階段の方へ目を向けた。

「あの女を捜しているんだけど、見なかった？」

宿敵、ベルモットの事を指しているのだと、怒りに燃える熱い瞳から窺い知る事が出来る。

ベルモット……コナンはさり気なく腰に手をやり、彼女からの贈り物――拳銃が確かに存在することを確かめた。

「さつき此処で会ったけど、何処かへ行ったみたいだよ」

階段を指差す。

「シユウはジンを追っているわ。他の捜査員達も、銃撃戦に入った。あなたは危険だから、建物の外へ出てなさい」

ジョディは親指を立て、ウィンクして階段の方へ駆けて行った。だが、彼女に甘えるわけには行かない。これは、自分にとっても闘いなのだ。父親が手を染めていたのなら尚更だ。

「さて、俺はジンを探すか。データだけでも手に入れないとな……」

恐らく無傷では済まないだろう。FBIの統制下にある彼らと違い自分には防弾チョッキなどは支給されてない。たった一人きり、音を立てないよう注意を払いながら更に下の階へ進んでいく。

上の方は、ジョディの言ったとおり、惨事になっているようだ。時折連射されるライフルの音、飛び交う英語の叫び声が、暗い暗い影に抵抗するように聞こえていた。それらの悲痛な叫びを振り切つて、ゆつくりと、慎重に階段を一段一段下りていく。何となく、下に行けばジンに会える気がした。

漠然とした靄^{もや}が胸を覆い、息苦しかった。それは、何かの予感を指し示しているようで――身震いするような冷氣の中で、不思議とコナンの体は熱かった。体の底から沸き上がる得体の知れない感情を

押さえ込んでいたからだ。

驚嘆、憤怒、それとも悲哀。

とにかく、今は下に行くしかないのだ。

FILE・7 禁断の薬品棚

「そんな危ない事になつとんたんか」

平次は小さく呟いた。想像を遥かに超える。恐ろしいと思う反面、不謹慎ながら自分もそんなスリルの中に身を置いてみたいと思った。どうやら根っからの野次馬らしい。

「流石の工藤も、自分の身近にボスがおるなんて想像せんかったみたいやな」

目の前の少年の顔が曇るのを見て、すぐに自分の失言に気付く。

「お、すまん。今のは失言やな……変な意味やないで。と、とにかく気にすんなや」

両手を前でぶんぶん振り回しながら、ごまかし笑いを浮かべる。コナンは苦笑いを浮かべながら、また語り出した。

「俺がようやくジンに辿り着いたとき、既に上の方の喧騒は静まっていた」

こんな町外れの廃ビルに、地下があるなんて、誰が気付いたんだろうか。長い螺旋階段^{らせん}を慎重に、且つ急いで降りながら、コナンは身

体の奥から震えが走るのに気付いていた。

灰原は、如何いかにしているだろうか。少なくとも、この敷地内から逃にげ遂おおせただろうか。誰かに見つかつていなければいいが……。そんな事を片隅で考えつつ、B2と書かれたプレートをくぐり、冷ややかなコンクリートの部屋に辿り着いた。

其処は、一見して研究室と判る作りになっていた。青白い壁、冷気が何処からか漂い、背筋を凍らせる。一概に言えば不気味と言う表現が似つかわしい。

一番近くの鉄の扉を押すと、扉は甲高い音を立てながら開いた。

部屋の隅にパソコンが1台、学校の化学室のように、ステンレス製の中規模な机が五つ。そして、薬品棚。薬品一つ一つに丁寧にラベルが貼られていて、コナンはゆっくりと棚に向かって歩いていった。

「シアン化カリウム、酢酸バリウム、それに……ヒ素?!」

ラベルを音読して、驚愕きょうがくする。其処に並べられているのは、全て強力な毒物だった。人を殺す威力のある、むやみに使用する事が許されない薬品たちが並んでいる。

「一体何の為に――」

何気なく、下の段の引き出しを調べると、何本もの導線らしきものの、そして、小瓶が無造作に転がっていた。

「ニトロトルエン、ジニトロトルエン、トリニトロトルエン、テトリル、ニトロセルロース、シクロテトラメチレンテトラニトラミン、ワックス…」

これらの材料を集めて、出来る物といえば、危険物に指定されるようなものばかりだ。―そう、例えばプラスチック爆弾。

これだけの殺人薬品を用意して、一体何をするつもりなのか。あまりのスケールの大きな話に、思わず一歩後ずさった時、テーブルに軽くぶつかり、上に載っていた電話が音を立てて倒れた。

「やべ…ッ」

慌てて直しても、時既に遅し。遠くから足音が聞こえ、一瞬後には反射的に身を屈めて薬品庫の陰に隠れていた。

コツ、コツ、コツ…

足音がすぐ傍で止まった。鉄の扉がまた開かれる。今度は別人の手によって。

「鼠が入り込んだようだな。ドブ臭い、小鼠が」

低く、殺気立った声とともに、金属音がした。事態は最悪だ。よりによって、コナンが知る中でもっとも頭が切れ、尚且つ殺人さえも厭わない男の登場だ。

かすかに機械が擦れる音が聞こえる。どうやら拳銃を取り出し、安全装置を外したようだ。コナンはこめかみを滴る汗を拭い、右手にずっしりと重い感触を得た。

ベルモットからもらった、最後の切り札。

「其処に居るのは解っている。五つ数えるうちに出て来い。……その身体に穴を開けなくなかったらな」

ベルモットからもらった拳銃を眺める。回転式拳銃。以前、ハワイで扱った事のある代物だ。皮肉にも、父親から教わったのだが……。もしかしたら、父親はあの頃からこうなる事を予測していたのだろうか？

コナンは自らの考えを打ち消すように頭を振る。”そんな事があってたまるか”と。

「きつ」

回転式拳銃。装弾数は八弾。弾倉にはきっちり八発の銃弾が装着されていた。

通称エスコートと呼ばれる銃。その名の通り、婦人が護身用のために持っただけの、ほとんど対戦用には適さないもの。あくまで護身に作られた種のため、相当近距離でないとダメージを与えられそ

うに無い。

既に、ジンのカウントは始まっていた。

「弐つ」

不意打ちで、ジンを殺す事は不可能だろう。それに、薬のデータの在り処を聞く必要がある。

「三つ」

コナンはすつくと立ち上がり、拳銃を後ろ手に隠したまま、ジンを正面から見据えた。

「また貴様か。他の仲間たちはどうした。赤井秀一は少々痛めつけさせてもらったがな」

ジンの舌打ちにハツとする。下へ降りる途中でも赤井秀一の姿を見ていないことに気がついた。

「殺したのか」

低く、大人びた声に、ジンは眉をひそめた。余りにも外見とはミスマッチだったのだ。

「奴の生命力次第だ」

その言葉に胸を撫で下ろした。きっと、生きている。願いと言うよりは確信だった。冷静に行動し、自分以上に頭の切れる男。しかも銃の腕も持ち、場数も踏んでいるプロフェッショナルだ。

「他人を心配する暇などないぞ。貴様、何者だ」

トカレフの銃口がこちらをじっと見詰めていた。

「江戸川コナン、探偵さ！」

恐怖は、何故が無かった。背中に隠したモノが、少なからず、勇気を与えてくれていた。それに、生きて戻らなければならない場所がある。

「探偵？ ……笑わせるな、小鼠^{ガキ}に何ができる」

唇の端を歪めて笑って見せるジンに、コナンは苛立った。

「悪いな、餓鬼じゃねーんだ。工藤新一だ、オメーに殺されかけた高校生探偵の、な」

ジンの顔から笑みが消えた。不思議な瞳で見詰める顔は感情を読み取るには情報が少なすぎた。

「ウオツカの忠告で思い出したぜ……マウスが幼児化した話は知っていたが、人間にも効果があったとはな……。シェリーの手によって死亡に書き換えられていた工藤新一、そうか、そんな意図があったとはな。お前か……………工藤優作の息子は」

苦々しげな表情がかすかに見え隠れし、コナンは戸惑った。

「組織にもはやあの男は必要なくなった。親子共々あの世へ送ってやる」

ジンの不躰な言葉に、コナンも反射的に背中に回した手を前に出し、瞬間的に撃鉄を引き起こしていた。

「何のつもりだ」

それでもなお、顔色を変えることなくジンは冷徹な瞳でこちらを見る。

「APTXのデータは何処だ」

もちろん、答えが返ってくることは期待していなかった。ただ、訊かずにはいられなかっただけだ。

沈黙の、睨み合いは続く。それが破られたのは、意外な場所からだった。

「俺との決着は、まだ着いてないだろう」

コナンは素早くジンの背後に視線を滑らせた。役目を終えたライフルを肩に下げ、ニット帽を被った男。ただ、いつもと違うのは、先刻の戦闘で負ったのだらう幾つもの傷口から所々血が滲んでいる事だった。

「たいした強運だな」

そう言ったと同時に、ジンは素早く体勢を変え、指は滑らかに銃を撫でていた。轟音と共に火を噴き、襲い掛かる。

赤井は平然とそれを除け、負けじとコートの中から銃を出し、ジンの左腕を目掛けて撃つ。一瞬の早業だ。

銃弾は、狙い通り左上腕部の肉を抉りとり、ジンは小さく呻いた。

「利き手が使えなくなっただな。さあ、悪いが遊んでいる暇はない。質問に答えてもらおうか」

赤井は小型拳銃を手中で弄びながら、不敵に微笑んだ。

FILE・8 眠れる起爆装置

「さあ、質問に答えてもらおうか」

赤井の口元は微笑んでいたが、その瞳は怒りに燃えていた。

「彼女を利用したのは何故だ。宮野厚司への反抗か、それとも俺への見せしめか」

必死に取り付けた約束は裏切られ、無残にも生を奪われた宮野明美。ジンは答えずに、右手に銃を持ち替えた。

「答える気はない、と言う訳か。素直じゃないと寿命を縮めることになるぞ… まあ元々あっさり喋る事はないと踏んでいたが」

いつもの淡々とした口調に戻り、赤井は視線をコナンに滑らせた。

「ボウズはデータを探して来い。この階は重要機密が多数保管されている。……必要なだろう？ 工藤新一にも、宮野志保にも――」

手負いの赤井を残して、ジンと二人には出来ない。コナンは頑として首を縦には振らなかった。

「行くんだ。彼女を救ってやって欲しい。姉を彼女から奪ったのは俺も同然だ。手助けをしてくれないか」

必死な瞳だった。コナンにも、宮野明美を救えなかった負い目がある。今、自分が行くべきなのか。そう考え、はっきりと頷いた。

「解った。一つだけ……罪滅ぼしと言うのなら、灰原^{あいっ}の為に死なないで」

それだけ残し、足早に部屋を出た。

ジンの表情は読めなかったが、強く頷いた赤井の決意を、信じることにする。

「ーさて、ジン。ケリをつけさせてもらおう」

長期戦にするつもりはない、とばかりにジンはコートの中に手をいれ、あるモノを取り出した。その顔には憎々しい笑みが浮かぶ。

「話すつもりも、犬死をするつもりもない。それに、残念ながらシエリーは既に俺の手中だ」

赤井が青ざめた。ジンが手に持っていたもの――

それは、小型のリモコン。起爆装置だった。

「シェリーはこの爆弾と心中だ。もつとも、心中するのはシェリーだけじゃない。ここにいる全ての者が、死ぬ事になる。お前もな」

ジンは薄暗い照明の下で、かすかに勝ち誇った。

「早くデータを見つけて、戻らねーと……」

その頃コナンは階の一番奥の部屋まで来ていた。もう、考えられる可能性は、其処しかない。ゆつくりとドアノブに手を伸ばす。他の部屋とは違い其処には鍵が掛けられていた。頑丈で、簡単には開きそうも無い。

「博士の発明品の出番、か」

複雑な心境でシューズに触れ、腰のベルトのスイッチを押す。

走馬灯のように、それを発明し自分のために改良してくれた温厚な老人の姿が心の中を流れていった。膨らんだサッカーボールを、鍵の方に狙いを定めた。

「行っけー！」

小気味のいい音とともに、ボールの空気がしぼむ音。ボールがしつかり命中した鍵は音を立てて壊れ、コナンはカーテンの引かれた真つ暗な部屋に足を踏み入れた。

思い出したように腕時計型ライトで明かりを点すと、其処は倉庫のような狭い部屋だった。ダンボールがたくさん重ねられ、左右に散乱している。試しに手短な一つを開いてみる。科学関係の雑誌や、分厚い薬学辞典、コナンはそれらをダンボールの中に押し込めた。

「畜生！こんなにあるのか……。時間を取り過ぎちまう！」

多少の苛立ちとともに手探りで壁のスイッチを探し当て電気をつけると、ダンボール同士の間、小さなすき間から白い足が見え、コナンは狼狽した。

恐る恐る近付いていくと、見覚えのあるウェーブのかかった茶髪。

「灰原、お前が何で此处に！」

倒れている灰原に駆け寄り、直ぐに首に手を当ててみる。

「脈はある。気を失っているだけか」

それに、目立った外傷は無い。安心しつつ、上半身を起こし、軽く揺さぶると、幸いな事に灰原は直ぐに目を開けた。

「大丈夫か？」

寝惚けたように、目をこすりながら、灰原はしばらく虚ろな眼差しでコナンを見上げていた。

「……く、工藤くん？」

恐らく何らかの方法で眠らされていたのだろう。自分もそれを使ったのかすぐに頭を振り、意識をはつきりさせ、灰原は自力で立ち上がった。

「ジン！ジンは何処？」

「今、赤井さんが足止めしてくれてる。それより、何で此处にいるんだ？いや、今は訊いてる暇はねえな、早く、薬のデータを探さね

「と、この部屋に在る筈なんだ」

頭を掻き毟る。焦りながら、一つ一つダンボールを引っ掻き回す。哀はもう一度軽く頭を振ると、コナンとは離れた場所で、コナンと同じようにダンボールをひっくり返し始めた。

「大丈夫か、灰原」

「ええ、それに、二人の方が早いでしょう？」

「それもそうだな……」

ぎこちない返答。コナンは書類を一枚一枚確認しながら、赤井の無事を祈っていた。少なくともまだ、銃声は聞こえていない。

アネノコイビト

もし、灰原が赤井の素性を知ったら、どう思うだろうか。”赤井のせいで姉が死んだ”と知ったら取り乱して、赤井を憎むこともあ
りえる。それに、少なくとも数度はあっているから、下手に再会させたら……コナンの胸が痛む。赤井が自分を責め続けている事は、客観的に明らかでこれ以上、どちらも傷付く必要はないのに。だが、
そう単純に行くのなら誰も苦労はしないだろう。

それに、灰原は両親の事をこのまま知らずに生きていくのだろうか。研究の事故で……と言う嘘を、信じていくのだろうか。それも、
哀しい気がした。自分自身、父親の事をこのまま知らずにいたら、
きっと、いつか、他の形で知ってしまったら、その事を悔やむに違
いなかったからだ。

「なあ、灰原―」

手を止めて口を開きかけたその時、階のどこかで爆音が轟いた。

「何だ、今の音」

「爆発なの？」

二人の動きが止まった。

FILE・9 残された爆弾

「唐突、だな」

赤井は少々驚いたが、しかしまだ冷静にジンを見据えていた。

「安心しろ。まだシェリーは死んでいない。シェリーには恐怖の顔で死んでもらわないと、処刑にならないからな」

先程からいつに無く饒舌な殺人者は、左手にもったリモコンの一つのボタンを何のためらいも無く押してみせた。小規模な爆発音。暗い暗い闇を宿した男。そのギラついた目つきに赤井は底知れぬ狂気を見た気がした。

「彼女を何処にやった」

返事を待たず、赤井は引鉄に手を掛けた。

「撃ってみるか……リモコン共々、俺を。その先にあるのは、この建物に居る全員の死だ」

そつだ、撃てる筈が無い。せめて、皆が退避してさえくれれば、ジーンと相打ち出来るが、生憎連絡手段が無いのだ。携帯は先ごろの戦闘で、赤井を庇い、粉々になってしまっていた。

早く戻って来い。

赤井は心の中で念じた。工藤新一が戻って来さえすれば、灰原哀——いや、宮野志保を探させ、更に上の階に居る仲間達の元で、安全を確保させる事が出来る。

全員が退避したときが、勝負だ。

赤井は傷だらけの身体を奮い立たせながら、両足に力を入れた。

爆発音とともに、地面がぐらりと揺れた気がした。そこまで大規模では無かったが、予想もしなかった衝撃に二人は顔を見合わせた。

「灰原はここにいろよ、すぐに戻って…」

コナンが大腿でドアの方に向かったとき、哀はすかさず駆け寄り、がっちりと腕を掴んだ。

「もうその手には乗らないわよ？」

その端正な顔に浮かんだ勝ち誇った笑みに、眼鏡の奥で苦笑する。

「ああ、じゃ、行こうぜ」

長い廊下へ出て、爆音がした方向へ向かう。コナンが調べて、AP
TXのデータがない事を確認したうちの一室が一目でわかるほど変
わり果てていた。

「この部屋ね。壁が黒く煤^{すす}けてる」

「ああ…それに―」

コナンは部屋の隅で屈んだ。

「予想通りプラスチック爆弾、だな」

先ほど薬品庫で見た材料がフラッシュバックする。

粉々のガラクタと化したそれを見る。恐らく、綿密に計算されてい
たのだろう。火薬はかなり少ない。だからこそ、部屋だけの被害で
済んだのだ。

「ジンの仕業ね…」

腕組みをし、小さく呟いた哀に、コナンは疑惑の眼差しを向けた。

「なんで判るんだ？他の組織の構成員かもしれないだろ」

「間違いないわ。ジンは、爆弾のエキスパート。こんな調節、赤子の手を捻るような物よ。他にも…仕掛けてあるのかもしれない」

哀はプラスチックの欠片を拾い上げた。鋭く尖った先で指の先端が切れ、鮮血が滲む。

「痛…」

一筋の赤い液体は、未来を暗示するかのように地面に落ちて弾けた。

「…ジンは何かを企んでるのね。早く、ジンを探さない」と

コナンの頭に、ジンの勝ち誇った姿が思い浮かんだ。薬品棚に在った多くの薬品、もちろん揮発性のあるものもある。そして、火薬、プラスチック爆弾の材料…

「灰原、お前はあの部屋に戻ってA P T Xのデータを見つけてくれ」

コナンが早口で捲し立てると、哀は驚いたように眼を見開いた。

「あなたはどつするの？」

哀の言葉に、コナンはチラリと鈍く光る凶器を見せる。

「灰原の為にも、あの人を死なせるわけにはいかないんだ」

コナンが口走った言葉など耳には入らなかった。ただ哀は驚愕の瞳で、コナンの右手にあるモノを見つめていた。

「それを何処で―」

「いいか！赤井さんと3人で、早くここを抜け出すんだ！もし赤井さんを見つけたら先に1Fまで上げれ」

哀の問いは無視し、コナンは銃を握り締めたまま走り去る。遠ざかっていくその後姿を見つめ哀は俯き加減に呟いた。

「私はあなたの隣は走れないのね」

顔を上げると、何かを決意した表情で哀はコナンの後を尾け始めた。

コナンは全速力で廊下を駆け抜けた。

「ジンの狙いは何だ」

灰原を始末すること……？そうなら、まどろっこしく眠らせて隠すよ

り、その場で射殺すれば良かったはずだ。何故、灰原を殺さなかったのか。幾ら考えても、もっともらしい答えは出てこなかった。

ただ、嫌な予感がする。綿密に計られた火薬の量。かなり少量なものだ。自分ならこんなとき、何に悪用するだろうか。一つ、頭をよぎった考えに焦点を当てる。

もしかして、ジンはもっとたくさんの爆弾を至る所に仕掛けたのではないか？早く赤井に知らせなければ。二人が対峙している部屋まで、あと一メートル……コナンはそのまま赤井とジンの間に飛び込んだ。

FILE・10 赤井の秘密、そして憎しみ

「赤井さん、無事か？」

コナンの問いに、赤井は静かに肯きしつかりした口調で告げた。

「ここから逃げろ」

「え……」

「宮野志保を捜し出して、早く地上まで戻れ」

ドアの外で成り行きを見守っていた哀はハツとした。

ここからでは後姿しか見えない男が自分の名を言った。どうして知っているの？ 小さな叫びを飲み込み、哀は反射的に口を押さえた。

中の話はまだ続く。

「どういつことだ？ 赤井さんも一緒に――」

赤井は唇の端を歪めた。

「そう虫のいいことはさせてもらえないだろう、この男にはな。俺はこいつを倒してから行く。恋敵だ。^{コイレトノカタキ}俺自身が、決着^{ケリ}を付ける」

赤井の声は弱々しかったが、表情には、固く決意がにじみ出ていた。

「恋人の敵って、もしかして、お姉ちゃんの…」

動悸が早くなる。コナンが頼っていたFBIの赤井という切れ者。彼がまさか、組織に入るために自分に近づいてきた諸星大だとは思わなかった。敵同士の組織の、禁断の恋。姉は、そのせいで殺されたのか。怒りと、どうしようもない切なさや哀の胸を押しつぶした。

「自分を犠牲にするつもりか!？」

コナンの声に、赤井は瞳を逸らした。コナンは頬を紅潮させた。

「さっき、あんたは言ったよな? 姉を灰原から奪った仇を討ちたいと。それで、俺は罪滅ぼしと思うのなら死なないでって。あんたまで死ねば、灰原が宮野明美さんと離れた後の事を、一生知る事が出来ないんだ。あんたが生きて、伝えてやれよ!」

「彼女は俺に会いたがらないだろう。さあ、早く、彼女を連れて行

け…爆発で、死にたくなければな」

赤井が低い声で言った。ジンは薄笑いを浮かべながら、左肩を押さえて壁にもたれた。

「ごめん、赤井さん。俺は行かない…助けたい人が居るんだ」

コナンはポツリと呟いた。心に描いたのは机に向かい夢を描いていた、父親の姿。

「父さんを、助けたいんだ。きっと、まだあの部屋に居る」

赤井は動きを止めた。ドア越しに聞いた会話を思い出し、コナンがどんな気持ちでその言葉を告げたのか、胸を痛めていた。

「だから」

哀は複雑な心境でそれを聞いていた。今の一言は、彼の父親が大きく組織に関わっていた事を、彼が最悪の方法で知ってしまった事を窺わせる。もっと早く、伝えていればよかった。

「だから―赤井さんは、灰原を連れて脱出してくれ」

真剣なコナンの瞳に、赤井が口を開きかけたとき、冷たい笑いが全てを引き裂いた。

「工藤優作を、助けたい、か？それは手遅れだ。この手で始末したからな……」

コートのポケットに手を突っ込み取り出したものは、見覚えのある黒縁眼鏡だった。

「な、何だと……？てめえ……」

部屋に、形容のし難い叫びとも呻きともつかぬ声が響いた。コンクリートに反響して、何重にも重なりながら、悲痛な声がガラスになってコナンに戻る。既に頭で整理できる許容範囲を超えていた。ジンの行動はコナンの心を壊し、コナンは奇声を上げて座り込んだ。

そしてそのまま大きく息をし、喘息にかかったように喘ぎ続けた。

「酷い事を――」

赤井がジンを怒りで睨みつけたそのとき、扉が開いて哀が部屋に飛び込んできた。

「工藤くん！しっかりしなさい」

焦点の合わないコナンの頬を軽くたたきながら、哀はゆっくりと呼びかける。

「工藤くん、しっかりして！」

尚も、コナンの瞳は虚ろに宙を見続ける。

「工藤くん!!」

丁度、哀がジンに背を向ける格好になっていた。ジンは奇妙な薄笑みを浮かべた。

「いい機会だ、地獄に送ってやる、シェリー」

ジンが引鉄を引く。不意を衝かれた素早い動作に、赤井はなす術も無かった。

破裂音と共に哀の身体が跳ね、哀は焼いた鉄を押し付けたような激痛に呻いた。

「灰…原…」

コナンが正気に戻ったとき、哀の右足からは、既にどくどくと血が溢れていた。恐らく血管を傷つけたのだろう。出血の多さに顔面蒼白になっている。コナンは上着を脱ぐと引きちぎり、止血して包帯代わりにぐるぐると右足に巻きつけた。

「良かった…」

哀は微笑み、その場に崩れ落ちた。

「しっかりしろ！」

「平気…私は、大丈夫だから」

駆け寄った赤井に哀を任せ、コナンは立ち上がった。もちろん、銃を両手で持ち構えて。

「ジン、お前だけは許さねエ…」

本当に、一瞬の対峙。

「調子に乗るな、餓鬼が」

ジンの瞳が鋭くなった。

瞬間、どちらからともなく二人の銃が火を噴いた。

「工藤くん、ダメ——」

哀の叫びも虚しく、最初にその場に臥したのは、工藤新一の方だった。その場が凍りついた。赤井の強張った顔が、哀の心に響く。

「大丈夫だ…」

腕をかすっただけ」

腕ににじむ血を押さえ、顔つきは厳しいもののゆっくりと起き上がったコナンに、哀も赤井も安堵の表情を浮かべた。

ジンは、大きく目を見開いた。

「馬鹿な―…」

ジンの脇腹から、どす黒い血が流れ出していた。防弾チョッキを突き破った銃弾は、コナンの怒りとともに確かにジンに届いた。

「アハハハ…黒い大砲は、銀の銃弾に負けたわね？…ジン」

弾けるような笑い声と高飛車な口調が背中から浴びせられ、四人が振り向いた。哀の表情が固まる。

「…ベルモット」

「あなたがどう足掻こうと、組織は崩壊。残念ね。あの方も死んでいないわ。瀕死の重傷の所を、FBIに引き渡した所よ。どれだけ口封じに人を襲っても、手遅れよ、残念ね」

ベルモットは髪を振り払うと、ジンを睨み付けた。

「ベルモット、どういっつもりだ」

ジンは眉を寄せながらも、みんなの注意が逸れたのをチャンスにコートを破って腹部を止血した。

「A secret makes a woman woman…」

ベルモットはそう呟くと、
腕を組んで、壁にもたれた。

「この科白は、姉の口癖だったわ。日本人に恋をした、愚かな姉の……ね」

今までの彼女からは想像できないほど、静かでやさしい口調だった。

FILE・11 語られた過去

「お姉ちゃん、最近やけにお洒落に力が入ってるのね」

ドレッサーに向かい、新色の口紅をつけている姉を、シャロンは恨めしそうに見つめた。

資産家だった両親が交通事故でなくなっからはイギリスの大きな屋敷で、両親の遺産の元で悠々自適の二人暮らしを仲のいい姉と共に楽しんでいたのだ。しかし、近頃は二人で買い物に行く事も少なくなり、まだ姉が恋しい年ごろのシャロンは寂しい思いを募らせていた。

「シャロンも、恋をしたら私の気持ちができるわ」

鏡越しに妹を見る姉の瞳は優しくかったが、シャロンは口を尖らせた。

「私はもう大人だわ。子ども扱いしないで！恋って、誰に？」

「A Secret Makes a Woman Woman」

姉はいつもそうはぐらかし、決してシャロンに名前を告げようとはしなかった。今思えば、姉はシャロンが危険に巻き込まれないように、取り計らってくれたのかもしれない。でも、そんな事は知る由も無く、おとなしい姉が、あんなに輝く笑顔になるなんて。シャロンはますます面白くなく、一人ぼっちで部屋に籠ってむくれていた。

「シャロン、ごめんね。今日、少し帰るのが遅くなりそうよ。今度、埋め合わせするから許して」

お気に入りの香水を振り掛けて、家を出たその日。姉は、シャロンの前から姿を消した。そして埋め合わせの機会は、一度も現れなかった。

ロンドン警察もお手上げで、ただの失踪に時間を掛けていられないとばかりに数ヶ月で捜査は打ち切られることになった。そして数カ月後、シャロンは寂しさを埋めるように、前々から志していたハリウッドの道を進んだ。弱冠二十歳で栄光を手にし、日本に素晴らしい奇術師が居ると知り、特殊メイクなどの技術を身につけるために来日、弟子入りしたりと忙しい日々を送っていた。

そして、十年が経ったある日。奇術師を通して知り合った日本人の友人、藤峰有希子から、偶然、姉の情報がもたらされた。

姉、エレーナの居場所が――…

驚く事に、姉は、日本人の有名な研究者と結婚し、二人の女児を儲けていた。何か、犯罪めいた事をしていても知った。しかし、姉はどんなに訪ねていても、シャロンと会う事を徹底的に拒否し、結局は不慮の事故で姉が死ぬまで対面する事は無かった。

「お姉さんが、死んだ？何を言い出すのよ有希子」

電話口から聞こえた静かな声に、シャロンは愕然とした。

「Why！有り得ない…間違いでしょ？」

どんな言葉も、シャロンが欲しがっているのとはまるで正反対だった。

「優作から聞いたのよ、研究中の事故だって」

ようやく電話を切ったとき、シャロンの胸には、ある疑惑と決意が生まれていた。姉の死は本当に事故なのか、何故犯罪に手を染めていたのか、そして、本当に死んでしまったのか。

それから、シャロンはハリウッドの仕事を減らし、変装し来日して組織の一員となった。

姉の死の真相を探る為に。

「最初は、下っ端と同じ仕事をしたわ。汚い、殺しの仕事をね。でも宮野厚司は私がある実験体になった事で、完全に私を信用したわ。何でもペラペラと話してくれた。自分の妻さえ不完全な薬の実験に使って、殺してしまった事さえも」

「そして、私の復讐計画は始まった。私の願いは唯一つ。組織の存在其のものを消す事だった。ある時、私は宮野が姉を殺したのと

同じ方法で、あいつを殺してやった」

シャロンはしっかりと口調で天井を見上げた。その瞳は湿っていて、コナンは哀の方をチラリと見た。

「…貴女だったのね」

ハンカチで傷口を押さえながら無表情に発した哀の言葉が解せず、赤井とコナンは目を見交わした。

「灰原…？知ってたのか」

戸惑いながら、再び上着を破り自分も止血を施しながらコナンは蒼白い顔をした哀に、恐る恐る尋ねた。

「誰、という所までは知らなかったけれど、お母さんに妹が居た事は知っていたわ。あのテープの、最後の言葉」

姉が隠していった、母からの誕生日プレゼント。その一番最後に残された、声。

『志保、実は、お母さんねー妹が居るの。あなたにとっては、叔母さんね。私にもしものがあつたら、叔母さんを捜しなさい。イギリスの何所かに居るはずよ。志保、あなたが幸せでいられますように』

優しく、軟らかで暖かい毛布に包まれているような、懐かしい声。思い出すだけでそれは哀の心を締め付ける。哀は暗記してしまったテープの声を、ゆっくりと繰り返した。

「灰原を攫い、殺そうとしたのは、死んだと見せかけて灰原を助ける為だったのか…」

合点が行くと言う様に、コナンは腕を組んだ。初めから、不可解な点が多すぎたのだ。ベルモットが校医の新出に変装し、帝丹高校に潜入した時だって、その気になれば、灰原や自分を引きずり出す事は容易かっただろう。自分も、A P T Xを飲んでいたのなら。

「なあ、ベルモット。さっき実験体、って言ったよな？と言う事は、飲んだんだろ？ A P T X 4 8 6 9 をさ…」

今度は哀が驚く番だった。ベルモットは愉しげにコナンを見ていた。コナンは続ける。

「年を取らないから可笑しいとは思ったんだ。特殊メイクでその顔を作っているとも思った。けど、F B Iと対決したとき、あなたの顔がオリジナルだと証明された…という経緯かは知らないが、あなたは薬を飲んだら若返り、年を取らなくなった。…そうなんだろう？」

「ご名答。あの男はね、私を邪魔者とみなした。毒薬と知らされずに飲んだわ。それから恐くなったのか、私は自由に振る舞うことを許された」

全員がベルモットの話に耳を傾け、孤高の危険人物から目を離していたのはあまりに愚かなことだった。しかし、気付くには遅すぎた。

その一瞬、二度目の爆発音が室内に轟いた。

FILE・12 血より濃い絆は無し

コナンと赤井がジンに目を向けた時、ジンは既に白いガスに覆い隠されていた。見る見るうちにガスは室内に充満し、四人は咳き込む。

「催涙…ガ…ス」

当然のことながら、窓はない。コナンがハンカチを哀の口元に運んだとき、赤井が二人を抱きかかえた。

「な!？」

「動けるか」

赤井の短い問いに、ベルモットは小さく頷いた。赤井が無愛想なのは、そう簡単に割り切れないせいだろう。確かに恋人と血は繋がっていても、どういう理由にしたって、組織の一員として、無意味な殺しをしてきた女にはかわりないのだから。

「ごめん、赤井さん…怪我さえなかったら」

コナンがなるべく煙を吸わないようにしながら、申し訳なさそうに謝罪する。赤井も傷付いていることには変わらないのだ。

「今は脱出が先決だ。ジンは恐らくもつと大きな爆発を起こし、それに乗じて逃亡する気だ。俺達も巻き込まれないとは限らない」

哀は煙の辛さと痛みで朦朧としている意識を、何とか保とうと必死だった。自分にはやらなければならぬ事が残っている。

「降ろ…して」

哀の言葉が耳にはいらず、赤井は階段目がけて走る。コナンは哀の考えている事をいち早く理解し、哀の腕を強く掴み首を横に振った。

「でもデータが！」

半狂乱に大声を上げた哀に、コナンはもう一度、しっかりと首を振った。

「危険だ灰原。もう、いいんだ」

その声は、隠し切れなかった哀愁を含んで居るように思えて、哀は涙を堪えきつく唇を噛んだ。

自分さえ、コナンの言いつけどおりあの部屋に戻ってデータを探していれば、まだチャンスがあったのだ。ほとんど嫉妬と言う名の私利私欲の為に、彼の後をつけた自分を、今更になって後悔する。

「ベルモットが！」

コナンの叫びに、赤井が立ち止まる。先程まで背後に居たはずの彼女の姿が見えなかった。

「…まさか、データを探しに戻ったのか？」

コナンが赤井の腕を振り切り、床へ着地する。

「…赤井さん、先に行ってくれ、ベルモットを連れ戻してくる」

「止めておけ」

赤井が瞬間的に哀を降ろし、コナンの身体を掴んだ瞬間、自責の念に囚われた哀が走り出した。

「灰原アア！！！！」

「行くな！！」

二人の叫びを無視し、哀は瞬く間に煙の中へ姿を消した。

「犠牲者を増やすわけに行かない…早く知らせるんだ」

「畜生、こんな時に…」

赤井とコナンは後ろ髪を引かれながらも、戻りたい気持ちを振り切り、地上目指して走り始めた。

「灰原アア！！！！」

「行くな！！」

二人の制止を振り切り、哀は怪我した足を庇いながらも、階段を下っていった。どうして、走り出したのか判らない。データの為？そ

れだけなら、諦めがついたかもしれない。しかし、ベルモットが消えた事に、哀は強い衝撃を受けたのだ。血の繋がった存在。それだけで、こんなにも心強いのだろうか。こんなにも嬉しいのは何故だろう。たとえば、その人が犯罪者だとしても。

壁を伝い歩きしながらあの部屋へ急ぐ。煙は大分分散したようだったが、哀は腰を屈めて、^{かが}出来るだけ煙を吸わないように進んだ。案の定、扉は開いている。

「出来ない……」

床に散らばった書類の山の奥に、彼女は座り込んでいた。ちょうど哀から死角になる場所に向かって、背を向けながら何かしている。

「何をしているの？…早く逃げた方がいいと思うけど」

返事はない。

哀がゆっくりと歩み寄ると、ベルモットの身体の陰に隠れていたものが目に入る。

時限式爆弾。

哀が声にならない叫びをあげると、ベルモットはようやく我に返ったようだった。

「…解体出来ないわ。早く逃げなさい。データは、死んでも守るから」

「あなたは――」

どうするの、と言う言葉をベルモットが遮る。

「五月蠅い、時間が無いのよ。お姉さんでも同じ事をするわ。あなたは、生きなければいけないの。権利じゃない、義務よ。あなたのお母さんの分も明美の分も、生きていつて欲しいの」

今までで一番優しい眼差しのベルモットに、哀の涙腺が緩んだ。

「そして、私の分もね」

哀から複雑な気持ちは消えていた。

「お断りよ。貴方にも、生きる義務があるのよ」

哀はベルモットの手を力いっぱい掴んで、部屋を出た。

「無理よ、一分も無いんだから」

足の痛みのせいで、体中から汗が噴出したが、哀はこの手を離してはいけないことだけは全身で知っていた。

二人は、防火扉の裏に素早く滑り込んだ。そして次の瞬間。大きな衝撃と共に爆発による突風と猛火が二人を襲った。

「危ない!!」

ベルモットが哀の上に飛び掛り、顔を苦痛に歪めた。そしてそのま
ま二人は意識を失った。

最後に見えたものは、降り注いでくる天井と、煙――

FILE・13 瓦礫と傷痕

深く大きく、まるで大地を揺るがすような爆発音が起こった。

地上に出て、広いロビーに辿り着いたばかりのコナンたちは、反射的に顔を見合わせ、柱に掴まって座り込んだ。大きなトルネイドのような爆風がビル全体に巻き起こり、一瞬のうちに大きな音を立て全ての窓硝子が割れ、吹き飛んでいく。コナン達もその煽りをくらい、顔に、身体に幾つもの切り傷が出来ていく。

「掴まれ！」

赤井が差し出した手を、コナンは極限の疲労の中で掴んだ。爆風に巻き込まれ、吹き飛ばないように掴んでいた柱から、血と汗に塗れた手が離れそうになっていたのだ。

力を振り絞って、赤井に手を伸ばす。赤井はそのままコナンを引っ張り上げ、抱きかかえた。そしてもはやその意味を成さぬ扉へ走ると、凄いスピードで外へ飛び出した。その時一瞬赤井の顔が苦痛に歪んだのだが、コナンは既にそれに気付く余裕は持ち合わせていなかった。

「シュー……！ 無事だったのね？」

ジョーディを始めとするFBIの面々が、赤井を取り囲む。赤井たち探しを断念し、一足早く脱出していたようだ。

「…悔しいけれど、ベルモットが爆発が起こる事を知らせてくれたのよ。組織の黒幕も、無事に搬送されたわ」

コナンは胸を撫で下ろした。

「それより…早く、助けに行かねーと…まだ、地下に二人が―灰原達が」

疲労困憊の身体に鞭打って、コナンが立ち上がる。しかし、既にビルは、
原形を留めずに崩れ去っていた。一歩足を踏み出そうとするコナンを、ジョディが無念そうに首を振りながら押しとどめた。

立ち込める炎の呻きが、コナンの叫びと重なる。ビルを飲み込み、まるで食べたり無い獣のように喰らい尽くしていく。誰もが息を呑み、蒼ざめていた。

「…畜生！」

赤井はコンクリートに向かって拳を突き出した。

明らかな、”敗北”。

組織を壊滅に追い込んだことさえ、小さく見える。何の犠牲を払わなかった事こそ、”勝利”と呼ぶ最低条件。それに、我々は失敗したのだ。

完全なる、”敗北”。

後ろからジェームズとアンドレ〓キャメル捜査官二人掛かりで押さ

えつけられるまで、赤井は自分を甚振り、血の滲む拳を瓦礫のコンクリートに叩きつけ続けた。

コナンはただ茫然と、成り行きを見ている事しか出来ない――

そして業火の中で瓦礫が一斉に崩れ落ちた瞬間、コナンは意識を失った――

FILE / 14 煩雑な思い

次にコナンが目覚めた時、周りは静寂に包まれていた。

殺風景な部屋。固いシーツの上に寝かされている自分に見えるのは少し灰色がかった白の天井。そして、窓から差し込む眩しい光だけ。全身が自分の物ではないように、重く、言うことを聞かない。コナンはゆっくりと右手を起こし、拳を握った。一応力が入るようだ。

「生きてるみてえだな…」

自分は、地獄から生還したのだ。しかし、沸き上がってくる喜びはほんのかすかで、コナンの心に影を落とす。灰原やベルモットを救えなかった。自分は、あまりにも無力すぎた。それに、父や他の傷ついたFBI隊員も気掛かりだ。思い切り踏ん張って、身体を起こす。

「痛っ…」

何とかベッドから降りると、全身が悲鳴をあげた。筋肉痛、そして自覚してなかったが、左足を強く捻っていたらしく、そのまま激痛に耐え切れず床に倒れる。弾みで、握っていたベッドの柵が外れ、凄まじい音が響き渡った。。

「やべっ…誰か来ちまうかな」

しかし、周囲は静寂そのもので、誰かが姿を現す気配は無い。

コナンは壁に手をつきながらゆるりと立ち上がると、ベッドに立て

かけられてあつた松葉杖を手に、再び立ち上がった。

「早く、博士にでも事情を聞かねーと…博士？」

この期に及んで、何故自分の口から真つ先に出る言葉が、阿笠博士なのか。彼は、確かに自分を裏切り、結果的に組織に情報を与えていたのに。それに信頼していたからこそ、裏切りの衝撃は深く大きい。それがまた落ち着きかけた心に歯止めをかける。そんな暗い気持ちを取り払う為、久しく会っていない幼馴染に思いを馳せた。

FBI達と行動を共にする為、阿笠邸に泊まると嘘をついて蘭の元を離れてから二週間。彼女の姿を見たい、声を聞きたい。心から溢れだして来る想いが、少し、憎悪の感情を消した。

「ジョディ先生に連絡して、あれからどうなったのか聞き出さねーとな…」

どんなに酷い結末だったとしても引鉄は自分が引き、原因を作ったも同然だ。全ての責めは自分にある。ぎこちない動作で廊下に出て、公衆電話を探す。見つからないように屈んでナースステーションをやり過ごし、給湯室に差し掛かったとき、中から聞き慣れた二つの声がした。

「有希子さん、すまんのう…わしのせいで、こんな事に」

「違うわよ、博士。誰のせいでもないわ。優作の弱さが、こんな事を引き起こしたの」

コナンは片隅からじっと中を覗き込んだ。頭を垂れている博士と、

一睡もしていないのだろうか、少しやつれた印象で博士を慰める母、有希子。

コナンは出て行くことも出来ず、複雑な思いでその場に隠れていた。

「新ちゃん、一生目が覚めなかったらどうしよう。医師の話だと、これだけ目が覚めないのは、精神が拒絶反応を起こしているかもしれないって。やっぱり優作の事、あんな形で知るなんてショックだったわよね。もう、三日も眠ったままなのよ」

震える声の有希子の言葉に、ようやく自分がどれだけ眠っていたのかを知った。三日も眠っていたのか、

「わしが、それとなく伝えていれば、きっとこんな事には…きっと彼はわしを恨んでいるじやろう」

博士が深々と有希子に頭を下げた。

胸が詰まる。目の前に居るのは、やはり、お人よしで、自分を昔から支えてくれた人に変わりは無いのに。自分の意識の中、仄かに残る不信任が、彼の方へ行きたいと言う気持ちを遮ってしまう。

「博士、やめてっいたら。さ、病室に行きましょう。今日こそ新ちゃんが目を覚ますかも、ね？」

「わしは―」

「いいから！」

コナンはそつとその場を離れた。

ポケットを確かめると、黒く煤け、液晶画面が割れた携帯電話と、家の鍵が入っている。コナンは公衆電話へ行くのをやめ、エレベーターに向い、階下へ進んだ。今はまだ、心の準備が出来ていない。蘭の元へ帰るのも、病室で彼らに会う事も。自然とコナンの足はジヨディの住むマンションへと向かっていた。

有希子は渋る博士を引っ張り、個室の病室へ戻っていた。

「新…ちゃん？」

無造作に転がったベッドの柵、そして、皺の寄った空いたベッドを目にし、その場に立ち尽くす。

「あんな酷い怪我をしてるのに、一体何処へ…？」

そう、三日眠り続けたからといって、簡単に回復するような生易しい怪我ではないのだ。

「行き場所が見当もつかん…。こんな時哀くんがおってくれたら…」

博士は暗く沈んだ声で呟いた。その言葉に悲痛な面持ちで有希子は俯いた。

「無茶しおって…早く連れ戻さんと。有希子くんは医師ドクターに連絡を。
わしがその辺を探してこよう、まだ遠くへは行つとらんはずじゃ」

そういい残すと、阿笠は足早に病室を出て行つた。

着いた時は既に日が傾き始めていた。ジヨディは運良く帰宅していたようで、直ぐに応答してくれた。

「ジヨディ先生。江戸川コナンだけど、開けてくれる？」

インターホン越しにコナンがそう伝えたと、彼女は即座にロックを外してくれた。

「―意識が戻らないって聞いてたけど…」

松葉杖に、そこら中包帯だらけ、そして入院着のままのコナンを眺め回した後、ジヨディはダイニングの椅子にコナンを座らせた。

「さつき、気がついたんだ…」

差し出された麦茶を啜りながら、コナンは静かに答えた。その態度で、大筋はジヨディに伝わったようだった。

「抜け出してきたんでしょう？」

「まあね」

苦笑いする。

悪戯っぽく微笑んで、仕方ないわね、という風に肩をすくめて見せたジヨディに、コナンも曖昧な笑みを返す。

「けれど、丁度良かったわ。あなたに尋ねなきゃいけないことがあったの。――これを、どうやって手に入れたのか」

ジョディは立ち上がり、仕事机の引き出しの中から回転式拳銃を取り出し、コナンの目の前に置いた。彼女の瞳からは、既にひょうきんな色は消えている。これはあの日、ベルモットに貰った物だ。

「―その前に聞きたいんだけど、灰原と、ベルモットは…」

ジョディはコナンと同じ目線になるように膝立ちになった。

「二人とも、何とか一命は取り留めたわ。君が意識を失ったあとのことを教えてあげるわね」

コナンが意識を失った時の爆発―

その後、建物は本格的に瓦礫と化していた。彼女達がいるのは、地下二階。生存は、誰の目から見ても絶望的だった。

「…各隊、遺体収容作業に移りなさい」

無理やり紡ぎ出す様なジェイムズの言葉に、その場にいた皆が上司の言葉を神妙に受け止めていた。

「…生きている可能性は零じゃない。早く、瓦礫を退ける作業を…頼みます」

出血が多く、ふらつく赤井を横で支えながら、ジョディも頭を下げた。一縷の望みでもあるならば、それに賭けたい。

「私からもお願いします、ボス」

キャメルも深々と頭を下げた。二人に両脇を支えられながら赤井は祈るように作業を見ている。

「……よし、今すぐ掛かってくれ」

ジェームズが表情を和らげると、赤井は安堵の表情を見せ、ゆっくりとその場に座り込んだ。

「シュウ、あなた出血が酷いわよ！」

ジョディの手に、べっとりとした感触があった。赤井は蒼ざめた顔で、電柱に凭れる。

「止血、したんだがな……子供たちを抱えて走ったときに、傷口が開いたらしい」

ジョディは、すぐさま救急車で病院に行くよう説得したが、赤井は頑として首を縦に振らなかった。

「どうしても、彼女の無事を確認したい」

強い口調に、ジョディは苦笑しながら止血だけして、その場を離れた。自ら瓦礫を一つ一つ動かし、赤井の望むとおり、彼女達の生存を確かめる為に。

周りの協力もあり、半刻ほどで地下が露わになるほど、片付けは進んだ。そして、更に三十分後…

「生存者、二人発見しました。直ぐに救出に移ります」

奇跡にところどころから歓声が上がる。ジョディの視線を感じながらその声に安心し、赤井はゆっくりと瞳を閉じた。

「ベルモットが女の子に被さるように気を失っていて、防火扉の下敷きになっていたわ。少しでも救出が遅れていたら、命が危なかったでしょうね…。ベルモットは背中に大火傷。それに、二人とも長い間燃え盛る酸素の少ない地下にいたから、脳に酸素が行かなかった時間が多すぎて、なかなか意識が戻らないのよ」

「そんなに…？」

「生還できた事が奇跡なのよ…その後の処置が早かったから後遺症も残らない。安心して」

ジョディは慰めるようにコナンの肩を叩いた。愕然とするコナンをよそに、ジョディは再び例の拳銃を手に、コナンを問い詰める。

「質問を変えるわね。誰にもらったの？」

妥協を許さないと言うように、真剣な面持ちのジョディに、コナンは隠せないと感じた。

「…ベルモットに」

ジョディは大きく息を吐いた。

「そう、やっぱりね。…本当なら、銃刀法違反。あなたも補導されるところよ?」

軽くコナンを睨んだ瞳は、笑いを含んでいた。

「シユウから口うるさいぐらいに頼まれたから、今回は目を瞑る事にするけど、二度とこんな事はごめんよ」

コナンもジョディに目を合わせ、肯いた。練習の時とはワケが違う、命を懸けた一発。自分の右手を見る幾ら、悪人と言えども。自分が何の躊躇いもなく、ジンを撃てたこと。それは、心に大きな傷を残していた。

「…ようよ。」

考え事をしていて、少し、ぼんやりとしていた。だから、次にジョディが話した言葉は、コナンの頭に届く事なく、耳をすり抜けた。

「へ?」

間の抜けた声でコナンが顔を上げると、ジョディは少し苛々したように、刺刺しい声で繰り返す。

「ベルモットが私達の元へ運んできた、組織のボス。直ぐに救急搬送したんだけど、手遅れだったようなの」

コナンの視界から、全ての色が消え失せた。

「…死んだ、の？」

「ええ、これで組織の真相は闇に包まれたままだわー…黒幕がこの世から去ってしまったんだから」

顎に手を当てて残念がるジョディをよそに、コナンは呼吸を乱していた。

赤井は、自分の正体を同僚であるジョディにも話さずに居てくれたのだ。それは、感謝すべき事なのだろうが、こんな形で、父親の死を知ったのは、かなりのインパクトだ。

自分でも気付かないうちに、コナンは立ち上がっていた。

「…コナンくん？待って、まだ話が―」

「ご、ごめんね、先生。病院に戻るよ。まだ…体調も万全じゃないし、またね」

コナンは逃げ出すように夜の街へ飛び出した。ジョディが何かを言いかけたことにも気が回らないほど、動転し腐っていた。ネオンが入り乱れる街。行き交う人は、松葉杖の少年を同情的な目で見たり、夜の都会で訝しかったり。

そんな人の目に気付くことなく、一心にコナンは足を進めた。

工藤という表札の下がった、主をなくした洋館へと。

FILE・15 明暗（後書き）

更新停滞すみません。

完結してからまとめて読んで頂いた方がいいかもしれません。

多少テンパった頭で書き殴っているので、

随時修正していきます。

FILE・16 深夜の目覚め

コナンの病室では有希子が心配そうにウロウロと歩き回っていた。博士はコナンを探しに行ったり、もう何時間も帰ってこない。長く、日本を、息子の元を離れていた自分は、なす術もなく、心配する事しか出来ず、もどかしさを感じていた。

「ーそうだ、蘭ちゃんなら…」

不謹慎ながら病室で携帯を取り出し、以前登録しておいた番号へ掛ける。相手は、二コールで明るい声を出した。

「はい、毛利探偵事務所です」

「あら、蘭ちゃん、私、わかる？」

出来るだけ、なんでもない風を装う。ここが腐っても元女優の名演技の見せ所だ。

「新一のお母さん…今、アメリカですか？ 声が近いですけど…」

「ちょっと戻ってきたのよ。息抜きがてら、コナンちゃんに会おうと思って…電話代わって貰えるかしら」

暫しの沈黙のあと、蘭は沈んだ声で答えた。

「ごめんなさい、コナンくん、博士の所に泊まりに行つて、もう十日ぐらい帰ってきてないんです。携帯も繋がらなくて」

気の毒そうな蘭の声に、良心が痛む。

「そうなの、ありがとね、蘭ちゃん」

電話を切って、ため息をついた。

「絶対蘭ちゃんの元に帰ると思ったんだけど、な」

長いしなやかな髪を振り払い、涸れ果てる事の無い涙を拭う。長く、苦楽を共にした伴侶を、最悪とも言える形で失ったのだ。それが、三日を経た今になっても、現実となり重くのしかかっていた。そんな精神状態に加え、散々警視庁の高木刑事やFBIのジョディ捜査官らと話をし、有希子は疲れ切っていた…

一方、博士は哀が眠り続けている病室にいた。

「新一君が行きそうな所を、教えてくれんか」

哀の手を握り、囁きかける。しかし、反応はまだなく、眠り姫の如く固く目は閉じられたままだ。博士は花瓶に見舞いの花束を差し込むと、静かにその場を立ち去った。

その気配を感じ、哀は目を開けた。

ゆっくり身体を起こす。ひどく痛むのは足だけで、他は擦過傷だ。

「ジン…FBI…工藤くん…爆発があつて…」

まだ靄がかかっている頭を小突いた。

爆発の瞬間、ベルモットが自分に多いかぶさった姿がフラッシュバックする。破裂音と、激しい光、そして降り注いだ破片の雨。息が出来ず、苦しみの中で気を失っていた事。

「みんな無事かしら…」

いろいろな事が起こりすぎて、頭が追い付かない。視線を窓に向けると、外は闇色に染まっていた。

ベルモットが着ていた黒いスーツを思い出させる漆黒…

哀の頭が次第にクリアになった。

「ベルモット…」

ふらふらと歩き、ナースステーションに赴く。二人の看護師が忙しそうに動き回っている。

「あの…」

気兼ねしながらも声を掛けると、世話好きそうな中年の看護師が、哀のもとへ駆け寄ってきた。

「あら、あなた三〇五号室の灰原さんね？体調はどうかしら。大変だったのよ、意識が戻らなくて…直ぐに先生を呼びましょうね、で

も」

延々とお喋りが続きそうな雰囲気を感じ、哀は恐る恐るその言葉を口にしました。

「あの、私と同じ頃に運び込まれた外人の女の人はい…」

看護師は眉を寄せて口を手で覆うと、さも残念そうに、立ち止まってこつちを見ていた若い看護師と目を見交わした。

「言いくいのだけね…」

その言葉に、哀は絶句した。

心臓が激しく脈打って、締め付けられるようだった。

「まだ、集中治療室^{ICU}から出られないのよ…。容態が安定しなくてね、火傷も酷いし、それに、意識もまだ…」

「そう…でも生きているのね」

生きてると知り、ホッとしたのも束の間。まだ、樂觀できる状況ではないのだ。

「集中治療室には入れるの？」

「外から見るぐらいなら出来るけど、でも、あなたは病室で安静に—」

忠告など聞く耳を持たず、哀は会釈した後足早にその場を離れた。ガラス張りの集中治療室まで行く。身体中にコード、電子機器が装着され、酸素マスクで顔の大部分を覆われたまま横たわっているベルモットが其処にいた。

今もまだ、生死を彷徨っているのだ。

哀は長椅子に腰を下ろし、じっと身じろぎもせずに叔母の姿を見守り始めた。

「生きなきゃダメよ…お母さんの分も」

―長い夜になりそうだ。

哀はガラスの向こうから絶えず耳に入る、従順な機械音を聞きながら、大きく息を吐いて壁にもたれた。

FILE・17 主を失くした洋館で

ポケットに鍵を入れていたのは幸運だった。

コナンは慣れた手つきで鍵を回しながらそう思った。怪我のせいで体力はじわじわと削り取られ、今やコナンの呼吸は大きく乱れていた。

電気スタンドに明かりを灯し、皮張りの椅子に座る。昔から新一が大好きだった書斎の、特等席。床に足が届かないくらい幼い時から、よじ登っては父親に叱られたものだ。

組織の詳細は闇に葬られた。父親の真意さえも。

何故こんな事になったのだろう。

自分が探偵になると言う前に、拳銃の扱いを教えた父親。その心中を悟る術は、もう無い。探偵になりたいという気持ちさえ、コントロールされていたのかもしれない。

「父さん……」

机に立てかけてある家族写真で、口元を綻ばせている父親の姿を撫でた。

笑顔で腕を組んでいる両親、そして真新しいサッカーボールを、小さな腕で抱えて満面の笑みを浮かべている自分。ちょうど、十年前の頃だったか。コナンの姿とほぼ同じ自分。

様々な想い出がフラッシュバックし、コナンはいつの間にか机の上に突っ伏し、眠り込んでいた。

そして、その数分後、息を切らして工藤家の前に佇んでいる少女がいた。

「コナンくん……」

幼馴染である新一の母から電話をもらった時、蘭は有希子の言葉の中に違和感を覚えたのだ。蘭の知る限り、神経質な部分を持つ自分の母と違い、新一の母は、少しの異変では騒ぎだてるような事はない。それに数日前からコナンの携帯が通じない事を、蘭は既に気付いていたのだ。

阿笠邸には一筋の明りも灯らず、人の動く気配は無い。蘭は無意識にコナンが新一の家に居る事を感じ取っていた。どうやって入ったのか、理論的な事は判らないけれども。蘭の中の女の勘が閃いたのだ。

そして、その考えが正しい事は、薄らと見え隠れする光、そして半開きになっている扉によって証明されていた。

「コナンくん?……」

乱雑に脱ぎ捨てられていた靴を揃え、蘭は控えめな態度で上がり込む。

コナンの居場所は、容易に知る事が出来た。それは、書斎から小さな明りが漏れていたから…。

書斎を覗くと、本に囲まれながら寝ているコナンがいる。蘭は微笑んだ。

「こんな所で眠っちゃうなんて、大人びててもやっぱ子供だね」

小さく呟いて、コナンが眠っている回転椅子の横に落ちている松葉杖を拾い上げた。

「松葉杖…まさか怪我…？」

確かに、足には包帯が巻かれて、真新しい血が染みている。蘭は眉を寄せ、思わずコナンの肩を揺すった。

「…ん」

小さく伸びをしてコナンが目を開け、小さく欠伸をしてふと蘭に気付く。

「…あ」

悪戯を見つけた子供のようにつろたえ、コナンは作り笑いを浮かべた。

「あ、じゃないでしょ？ コナンくん、新一の家で何してたの？ こんな夜遅くに。新一のお母さんがご用があるって探してたわよ」

コナンの顔が曇ったのを、蘭は見逃さなかった。

「…それに、その怪我。また無茶したんでしょう…？ 阿笠博士もいないみたいだし」

「ごめんね、蘭ねーちゃん。今は、何も話したくないんだ。それに…ボク、戻らないと」

おもむろに蘭から視線を外したコナンに、蘭は眉を寄せた。こんな余裕の無いコナンを見るのは初めての事で、何かを断ち切るようないつになく強い拒絶に戸惑ったのだ。

「コナン…くん？」

「蘭ねえちゃんは家に帰ってて。危ないかもしれないから…」

そう、ジンがまだ生きているとすれば、逆恨みして蘭をも襲いかねない。奴もかなりの深手を負ったはずだ。コナンの心配を他所に、蘭は仁王立ちしてコナンを叱りつけた。

「何を言ってるの！ 大怪我してる人を放って置けるわけないでしょ！？ 送っていつてあげるから。何処に行くの」

優しい、しかし強い口調に、コナンは口を噤んだ。

かくして、コナンは、蘭と共に米花中央病院へと戻る事になったのだった…。

FILE・17 主を失くした洋館で（後書き）

書いている内に、

自分の中でも混乱して来ました。

最初に思い描いていたラストとは違う展開になりそうです。
とは言っても、お話はまだまだ続きます。

静けさを取り戻した深夜の病院に二つ、戻る影があった。あれから黙りこくったままのコナンを支えながら、蘭はこの理解しがたい状況に首を捻っていた。工藤家から出るとき、コナンがしつかりと鍵を取り出し、施錠したのを見てから。新一にたまに見てくれと合鍵を託された蘭。では何故、コナンがそれを持っているのか。何故？と訊ねようにも、今のコナンの周囲には人を寄せ付けないオーラが醸し出され、蘭は今は何も言わない方がいいかもしれないと思った。

「足、痛くない？」

「…うん、平気だよ」

血は止まったらしく、包帯の上から痛々しくどす黒い乾いた血が染みている。平気な筈が無いのに、笑ってみせるコナンに蘭は弱みを見せてもらえない事に少し悲しみを覚えた。じつと覗き込んだコナンの瞳の奥には、深い苦しみを背負っているように見えた。その姿に、蘭はかつての新一を重ね合わせていた。

中学のサッカーの大会で、新一が相手の反則で転ばされた時。タオルを持って駆け寄った蘭に、新一はまるで何事も無かったかのように笑いかけた。

「バーロー、んな顔してんじゃねーよ。俺は平気だぜ？」

「でも、新一…腫れてるじゃない」

「諦めてたまるかよ！」

痛いはずなのに、二カツと笑った。その後、顧問の忠告も聞かず、無理をして試合で30分以上も走り続け、決勝点となる一点を入れた新一。ハラハラしながら見守る蘭の肩に手を置いて、新一のお父さんが言った言葉を、蘭はまだ覚えている。

「もしここであいつが棄権すれば、一番悔やむのはあいつ自身だ。あいつは幼い時から新一はどんな弱さも人に見せないで、一番後悔しない方法を選ぶ事を知っているんだ。…とても羨ましい生き方だ。見ている方は気が気じゃないがね」

それでも息子を幾らか誇らしげに眺める姿に、蘭もつられて背筋を伸ばしたものだ。そして、その試合に幕が引かれた後に蘭は気が付いたのだ。新一の瞳の奥に、苦痛の色が色濃く映っている事に。有り得ない、そう言われれば口を噤むしかないが、蘭はその時から、確かに新一の様子が変なときは、瞳を覗き込むことにしていた。

今のコナンは、その時の新一と同じ瞳をしている。

夜間出入り口から、蘭とコナンはひっそりとコナンの病室へと戻った。

「阿笠博士も一緒なの？さっき博士の家の電気が消えてたけど…」

黙りこくるコナンに途方に暮れた時、足音に気付いたのか病室から一人の女性が飛び出した。

「新ちゃ」

有希子が怒りの形相で、コナンの前で止まる。だがコナンの横にいる蘭に視線を向け、慌てて言い換えた。

「コ、コナンちゃん…どこにいたの？ 心配してたのよ」

「蘭ちゃん、送ってきてくれたのね。ありがとう。悪いけれど、この階の談話室で待っててもらえる？ すぐに、車を回してもらってから」

静かな口調のなかに有無を言わせぬ意志を感じ、蘭は神妙に頷いた。

「じゃあ…コナンくん、安静にするのよ」

「うん、ごめんね。蘭ねーちゃん」

蘭の足音が遠ざかると、有希子はドアを閉めた。

「心配したでしょ、新一！」

コナンは足の痛みに耐えかねてベッドに腰を降ろした。

「ごめん…母さん」

赤く泣き腫らした瞳で、有希子がどれほど心配していたかは解っていた。

「博士も、ずっと新ちゃんを探してくれてるのよ。あとで、お礼を言わなきゃ駄目よ」

「ああ、わかってる。明日でいいか」

「いいけど…」

コナンは、蘭と会った事で大分落ち着きを取り戻していた。冷静に考えてみれば、阿笠博士は何も悪くない。

父親と対峙したときの言葉を思い出す。コナンが博士を恨むことを予期して、ああ言ったのか。やはり、一枚も二枚も上手だった。

「それと…証人保護プログラムを受け入れないか、ってFBIのジエームズって云う人から話があったの。真剣に考えておいて」

「証人…保護プログラム」

「適用すれば、もう私たちにも、蘭ちゃんや周りの人たちにも害が及ぶ事はないわ」

重大犯罪に関する証言能力を持っていて、それ故犯罪者に命を狙われる危険性のある者を保護する制度。これを受け入れれば、生命の無事が保証される。しかし、今まで関わってきた全ての友人、家族とさえ引き裂かれる。

コナンはじつと有希子の目を見返した。真実味を帯びた瞳が、じつとこちらを見つめている。自分は動揺している。それは、手の震えから明らかだった。

「私は蘭ちゃんを送って来るから、もう寝なさい。安静にしないで退院できないわよ。そして、ゆっくり考えなさい。新ちゃんのしたいようにすればいいから…」

下を向いたコナンの頭を有希子は優しく撫でると、席を立った。

「ごめん、母さん」

後に残されたのは、静寂、そして言い表しようのない虚脱感。証人保護プログラム。それらを振り切るように、明日は、灰原達の様子を見に行こう。そう決意して、その日コナンはあっという間に眠りに落ちた。

FILE・18 重なる想い（後書き）

久々の更新です。

もう、大きな事件は起こさない予定です。

後は、コナンが博士を許せるか、

そして、蘭とコナンの行方を、

しっかりと書きたいと思います。

重要なお知らせ

掲示板に書くことも考えましたが、

私事なので使用すべきではないと判断し、

こちらに書きます。

身内に癌が見つかりました。

私も、いろいろとお手伝い等する事ができ、

尚且つ受験勉強もありますので、

身内が退院するまでは、

執筆を停止したいと思います。

こんな精神状態では、

きつと自分の思うところ以外へと話を進めてしまいそうなので…

ご迷惑をおかけして、本当にすみません。

FILE・19 傷付いたモノ、複雑なオモイ

翌日は、昨日の疲れが出たのか、コナンは八時過ぎに医師の回診があるまで全く目を覚まさなかった。有希子はコナンの無事を再確認すると、色々とアメリカで手続きをするからと、名残惜しそうに発って行った。優作を霊安室に眠らせたまま――。

入院生活というのはまるでやる事がない。気になっていたベルモット達の容体をしようと、博士が見舞いに来ると残した有希子のメッセージを無視し、看護師に聞いた集中治療室へ向かう。

ベルモットの容態については聞いていたものの、改めて直接血の気の失せた白い顔のベルモットを見ると、とても辛い気持ちになる。

目の前の長椅子では疲れて眠ってしまった哀が寝返りを打っていた。

「彼女の友達かね？」

小さく硝子を叩く音とともにコナンが振り向くと、硝子の扉越しに、集中治療室の中から温和そうな老医師が微笑みとともに立っていた。

「うん、病室にいなかったから、ここかなーって思ってた」

「そうか、お嬢ちゃんなら、朝方まで一睡もしないでじーっと心配そうにあの女性を見ていたんだが、何しろ彼女の体調も良いとはいえなくてね、鎮痛剤をあげたんだよ。よく効いてすっかり眠ってしまったようだ」

親切な事に、老医師は小さな毛布を出して来てくれる。

「ありがとう」

コナンは哀にそれを掛けながら丁寧に礼を言う。そしてもう一度無機質な部屋に横たわっているベルモットの方を見遣った。

「案ずる事は無いよ、大分快方に向かつてるし、こんなにも心配してくれる娘がいるんじゃないから」

老医師がプロの目になったとき、コナンはようやく胸を撫で下ろした。

「じゃ、わしは朝の回診があるから」

老医師が去ると直ぐに哀が目覚めた。

「…私、寝てたの？」

素早く起き上がった哀は、コナンを見つけて問うた。

「無理もないさ、意識が戻ったばっかなのに、一晩中起きてたって体力が付いていかないだろ」

哀は目を擦り、欠伸を噛み殺しながら硝子の部屋を覗き込む。

「峠は越した、ってさ。お前、何でベルモットがそんなに心配なんだ？」

哀は真剣に考え込む。

「…私を庇ってくれたから。それに、彼女が私の叔母って知る前は、

怖かったし、憎んだけど、何故か今は穏やかで、彼女に生きて欲しい、って思うの。唯一残った、私の家族なのよね」

ぎこちなく紡がれた言葉達は、滑らかな科白よりよほど信じられる気がした。

「そっか…」

家族、その響きにコナンは少し哀しそうな表情になった。正真正銘の家族だった。そう信じていたのに、自分は両親の闇の部分に気付かず、それを追っていたなんて。

「灰原」

急に真剣な口調で躊躇いがちに哀の名を呼んだコナンに、哀は一瞬動作を止めて彼に見入った。

「…証人保護プログラム、受けないかって話があるんだ」

哀の表情が引き締まる。以前、哀はFBIからその話を持ちかけられ、断ったことがある。

「…工藤くんはどうするの？」

コナンが言葉に詰まる。哀は視線を斜め下にずらした。

「難しいわよね…誰にとっても」

声のトーンを落としながら哀が呟く。

「私たちも覚悟を決めるべきかもね。組織の残党がいつ襲い掛かってくるかも知れないし」

コナンも言葉を呑み込んだまま神妙に頷いた。予想どおり、ジンの遺体も瓦礫からは発見されなかった。これが一体どんな騒動を引き起こすのか、見当もつかないが、黙っているほど大人しい奴らではないだろう。既に、病院に入り込み、隙を窺っているのかもしれない。その時、階段から足音が響いて来て、二人は話を中断した。

「哀くん、新一くん。ここにおったのか」

「博士……」

複雑なコナンの胸の内を知ってか知らずか阿笠は遠慮がちにコナンから距離を取り、哀の横に腰を降ろした。

「二人とも、本当にすまんかった」

徐に頭を下げた阿笠に、哀は戸惑いの表情を見せた。コナンは頭を垂れた阿笠をじっと見つめていた。

「博士……。何故、謝るの？」

哀が阿笠の肩に手をやり、顔を上げるように諭す。

「わしは、君たちの父親と旧知の仲でありながら、二人を止める事ができなかった。わしが彼らを止めていれば……二人と、そしてエレナさんも絶命する事はなかったじゃろうに」

涙に濡れた瞳を隠すように阿笠は更に俯く。哀はきつぱりと言い切った。

「博士のせいじゃないわ…。運命の輪は回りだしたら本人にしか止められない。だから、もう気にしないで。一つ一つ、責任を背負っていたら、私は幾つの罪を背負わないといけないか…現に私は、毒薬を作り出してしまった。博士がしたことは、取るに足らないことよ」

暫しの静寂の後、コナンは阿笠の身体が震えていることに気がついた。哀は背中を摩りながら、小さな子を宥めるように優しく、尚も話し続ける。

「博士は、私を匿ってくれた。私が博士の傍にいれば、工―^{くど}いえ、彼が手を出さないと知っていたから。おかげで、私は今、生きてここに居るのよ」

哀はコナンの表情の変化を読み取り、名前を呼ぶのをやめた様だった。

「ありがとう、博士」

今まで見せたことの無い、優しく柔らかい笑みを投げかけ、哀はゆっくりと手を阿笠の皺の寄った手の上に置いた。

「哀くん…すまんの…ありがとう」

そんな二人をコナンはバツの悪そうに見つめ、徐に話を切り出した。

「博士、一緒に父さんの所…霊安室に行ってくれないか」

FILE・19 傷付いたモノ、複雑なオモイ（後書き）

複雑な気持ちを拭い去れないコナン。

頭ではわかつているのに、

心がついていかない気持ち。

コナンと阿笠は元の関係に戻るのか。

FILE・20 絆、そして依頼

地下に降りると、空気がガラリと変わり、灰色にくすんだ壁と、無表情な鉄の扉が二人を待ち構えていた。一瞬コナンは、それを組織のアジトと重ね合わせ、身震いする。

「霊安室に行ってくれないか」

コナンの穏やかな口調に、阿笠は静かに肯きながら一言も口を開かず、コナンの横を歩いた。鉄の扉はずっしりと手に振動を残し、今のコナンの気持ちと同じくらい重かった。

少し歪いびつなのか、何かと擦れる音が響く。冷たい部屋の中央に至って台が置かれ、皺のほとんど無い、白いシートが敷かれていた。そして、その上に横たわる、一人の男。顔には純白の正方形をした布がかけられ、一見して絶命している事がわかる。惨い姿に、二人は身震いを堪えることが出来なかった。

コナンは入り口で立ち止まり、一步も動こうとしなかった。阿笠はそんな少年を気遣い、優しく肩に触れ、声を掛けた。

「新一くん」

コナンは拳を強く握り、震わせながら、一步、足を前に踏み出した。外から入ってきた冷気が背中を撫で、瞬間、目を閉じる。

死が、間近で止まって、自分を見ている気がした。ゆっくりした足取りで、簡単な死後処置を施してある”それ”に歩み寄り、躊躇いながらもその手に触れてみる。冷気よりも冷たい、既に人間を逸脱している手。様々な残酷な事件で見慣れている筈の死体も、自分と

親しい人物だとこんなに見え方が違うのか。コナンはそう思い、一瞬固く目を瞑った

「…父さん」

息を吐きながら目を開く。そのもう動かない身体に小さく呟いて揺り動かす。一枚も二枚も自分より上手だった、父。探偵としての手本であり、生き方の手本でもあった。改めて、存在の大きさを知らされる。最後まで、どんな人物にしろ、自分にとっての父に代わりは無いのだ。

「…どうせ、ジンたちを騙す為に死んだ振りしてんだろ？」

あるわけがない。そう思ったかった。大きく見開いた目を痙攣させながら、コナンは小刻みに震えていた。自然に口を突いて出た。頭では死を理解しているつもりでも、心は、信じたくないと拒絶している。

「博士からも、言ってやってくれよ…父さんは本当に人を騙すのが好きなんだ。ほら、博士と母さんもグルになつて俺を攫った事があったろ？あの時も俺、父さんの手法にまんまと引っ掛かって―」

阿笠はコナンを自分と向かい合わせ、残念そうに首を横に振る事しか出来なかった。コナンの両肩に手を置いて、強く力を込めた。コナンは言葉を途切らせ、強く唇を噛む。薄く開いたドアから風が入り込んだのか、不意に優作の顔にのせられていた布が舞い落ちる。苦痛に歪んだ顔を思い描いていたコナンは、その表情を見て小さく息を漏らした。

「どうして…そんな顔してんだよ、父さん…怒れねえよ」

阿笠もじつと優作を見つめていた。彼が浮かべていたのは、仄かな笑顔。強いて言えば、安堵とも呼ぶべき柔らかい表情で、ただ眠っているようにすら見える。

「嬉しかったんじゃよ…君が自分に辿り着いた。偶然にしても、君にちゃんと正体を明かした事で、彼はきつと満足した…。罪を赦された気がしたんじやろう、たとえ、それが束の間だったとしても、君に事情を話す事が出来てよかったと…」

涙声で必死に言葉を紡ぐ阿笠に、コナンは初めて感謝の意を表した。

「ありがとう、博士…。父さんも、きつとそう思ってる。ジンは俺をいつ殺しに来てもおかしくなかったんだな、父さんを恨んでいたみたいだったし…博士や父さんに、俺は護られていたんだ、知らない所で」

大惨事を経て、初めて晴れやかな顔つきで笑いかけたコナンに、阿笠は心配しながらも、自らも穏やかな笑みを作る。

「父さん、母さんの事見守ってやってくれよ…」

コナンは阿笠にも届かない小さな声で呟き、阿笠を従え霊安室を後にした。

「あらかたは解ったで…とりあえずじいさんとは仲直りしたつちゅうわけやな？」

平次はグラスの中で完全に融けきった氷を飲み干した。コナンは小さく頷く。

「ねえちゃんを護るのに手を貸せ、ゆうても、ジンがいつ何時現れるかもわからんのやろ？」

「ああ。だから、こつちからきつかけを作るつもりだ。それより、今のままじゃ蘭まで巻き込んでしまう」

その言葉に、平次が眉をよせた。

「どついつこつちや？ちゃんと説明しいや」

「蘭が、俺の正体に気付いちまったかもしれない。一応俺から距離を取ってみるつもりだけど、きつと蘭は離れたがらない。ジンが俺を狙うと解っている今、あいつを近づけるわけにはいかねー。頼む、もし蘭が家にきたら何とか誤魔化してくれ。きつと、近いうちに蘭は俺に感情をぶちまけるだろう、解るんだ。あいつは俺を工藤新一だと疑ってるからな」

普段は筋道立ててしっかり話すこの親友が取り乱すのをみて、平次はテーブルに肘をついてからかうような笑みを浮かべた。

「よっしゃ、任しとけや。そんならしばらくお前んち泊まりこんだるわ」

平次は何か企んだ顔で満面の笑みを湛え、真剣な顔から一変したその表情に、コナンは少し顔を引きつらせた。

「―頼む」

FILE・21 心境の変化

そして、その数日後にコナンは退院した。何度か蘭が見舞いに來たが、コナンが面会する事は無く、その度に蘭はメッセージカードと差し入れを残し、肩を落として帰っていった。

「新一、一体どういうわけじゃ。蘭くんに会わんとは」

何度目かの後姿を見送りながら博士が咎める視線を送っても、コナンは無表情に、その話題を避けたがった。哀はそんなコナンを觀察する事に終始し、たまにこれ見よがしなため息をつき、コナンを苛々させた。

「灰原、言いたい事があるなら言えよ」

そう言うて決まって哀はコナンから顔を背け、別に…と釈明する。そ

「博士、しばらくオレ蘭の所には帰れねーんだ。結論が出せるまでは。だからオレはしばらく隣で生活するから、蘭には博士の家に泊まるって電話しといてくれないか？頼むよ、博士」

真顔で頼み込んだコナンに博士は困惑を隠せない。そんな博士をよそに、隣の哀は、深刻な表情でじっとコナンを見ていた。

「いいじやろう、蘭くんにはわしから適当に説明しておこう。君も父親を失ったばかりじゃ、あの家でゆっくりするのでもいいかもしれないし」

博士はコナンをいたわる様な目で見ていた。様子から察するに、ま

だ優作の事を引き摺っていると考えたのだろう。コナンは弁解することもなく、ただ礼を言う。

「サンキュ、博士」

「もしもし。あ、阿笠博士。こんにちわ、あの、コナンさんの怪我ってどうですか？え、退院した？はい、はい。わかりました。コナンの事、お願いします」

蘭は受話器を置くなり大きなため息をついた。

「どうした、蘭」

缶ビールを呷りながら普段と違う、元気の無い姿に気付いた小五郎は、見ていたテレビから視線を外した。

「コナンくん、しばらく博士の家に泊まるんだって。私、コナンくんが退院した事も知らなかったんだよ？何で、教えてくれなかったのかな。いつもいつも、秘密にするんだから」

珍しく落ち込んだ蘭に、小五郎は一抹の不安を覚えずに居られなかった。コナンが怪我をして入院していると聞いた日から、蘭は日に日に刺々しくなっていた。

「あいつにも、何か事情があるんだろ。放っておくんだな」

蘭が三階へと姿を消した後、心配になった小五郎は受話器に手を伸ばし、ある番号へかけた。

「お久しぶりです警部殿、あの、少し気になる事が。コナンの事なんですけどね、最近大きな怪我をしたものですから、あのガキがまた何か余計な事に首を突っ込んで、警部達の邪魔をしたんじゃないかと――え？ここんとこ見てない、そうですか。――え、いえいえ。何でもないっすよ、警部殿。では」

静かに受話器を置くと、小五郎は短い間考え込んだ。しかし、元々長続きするタイプではなく、直ぐにまた関心をビールに向けた。

「ったくよオ、フラフラしやがってあのガキ、今度会ったらただじやおかんぞ」

酔いが回り、ふらつきながらも冷蔵庫にビールの缶を取りに行った小五郎を、向かいのビルからじっと監視しているものが居た。

「フンッ、やはり奴はただのヘボ探偵か。全て工藤新一の所業だったんだな」

双眼鏡を手にしたジンは所々ボロボロになりながら、屋上に座り込んだ。

「野郎、今日退院した筈だ。戻ってくるまで待たせてもらおうか。直ぐに地獄を見せてやる。この傷の礼だ」

手で、銃弾が貫通した場所を押さえる。辛うじて止血できたが、そのダメージは半端ない物だった。数日は安静にしていたが、腹の奥で言いようも無い屈辱が蛇のようにうねる。体力は、じわじわと削られていく。ジンの額の汗を拭った時、足元で何かが動く気配がした。白い毛を身に纏った猫だ。迷わず腹を蹴飛ばすと、猫は鳴き声を発する事無く倒れ、二度と動かなくなった。無表情にその死体を見下ろしながら、ジンの心には強い憎しみが宿っていた。

「待つてろよ、工藤新一。お前は確実に――」

その目は、激しい怒りに燃え、その体は、激しい屈辱に打ち震えていた。

FILE・22 激情の果て

その日の夜、哀はコナンの元を訪れた。ここ数日やけに無口で、暗い表情のコナンが気になったのだ。

「工藤くん、何故彼女に会わないの？あの態度、彼女絶対に傷付いたわよ」

哀の言葉にもコナンは何の表情も見せない。哀は少し苛々しながら、語調を強めた。

「聞ってるの？彼女の元に、ジンが行くかもしれないのよ？ちゃんと傍に居てあげないと」

「ジンは、確実に俺を狙ってる。さっき赤井さんから米花町に向かう駅で奴が目撃されたと連絡があった、…傍に居たら、蘭がもっと危ねえだろ！それに、危険な理由をどう説明する！？」

そう、コナンは先の事まで考えていたのだ。もし、すんなりと毛利探偵事務所に帰れば、ジンは毛利探偵と自分の関係を疑うだろう。そして、自分が事務所に戻らないことを自然にする為には、蘭と距離を取っておく必要がある。

これは、コナンにとっても苦渋の決断だったのだ。

「それより、灰原。ベルモットの所に行くのか？」

ベルモットは峠を脱して一般病棟に戻っていた。小さく肯いた後、哀は黙って目を伏せた。

「本当にごめんなさい」

何度も、口にした言葉。燃えてしまった書類はもう戻らない。こしはらくの塞ぎこみ、苛々しているコナンの様子に、哀はすっかりと自分を責める癖をつけてしまっていた。

「今更んなこと言っただって始まらねーだろ？ 気にすんなって」

口調を和らげたコナンに、哀は躊躇いながらも頷き、踵を返して出て行った。

一人残された部屋で、じつくりと今後の事を考えるつもりだった。しかし、そんな考えは直ぐに打ち砕かれた。無常にも呼び鈴がコナンの全身に響き渡り、コナンは顔を歪めた。そしてそのまま、来客を無視し、革張りの椅子の上でじっとしていた。二階には人の気配、そちらは予め招いておいた賓客だ。

「コナンくん、いるんでしょう？」

声の主に驚きつつも、来るべき時が来たのだと、コナンは二階にいる客の携帯に着信を鳴らして切る。合図だ。

「博士から聞いて来たんだからね！ わかってるのよ」

「騒がないでよ、蘭ねえちゃん」

二度目の呼びかけで急いで扉を開いた。そして手早く蘭を玄関に引っ張りあげると、一人で外へ走り、一瞬だけある一点を見つめ、

直ぐに玄関へ戻る。蘭はそんなコナンを怪訝な表情で見ていた。

コナンは無表情で蘭を書斎に入れると、元の場所に戻った。

「コナンくん、どうして新一の家に居るの？」

直球すぎる蘭の言葉にも、コナンは表情を崩さなかった。

「ボク、新一兄ちゃんの遠い親戚だし、この前に新一兄ちゃんのお母さんに会った時にもらったんだよ。合鍵を。一人になりたい時に使いなさい、って」

蘭はほとほと困り果てたようだった。直ぐに江戸川コナンがボロを出すとも思っただろうか。コナンは蘭の考えを見抜きながら、巧妙にすり抜けてみせる。そんな決意を滲ませながら、コナンはゆっくりと深呼吸した。

「コナンくん、本当は新一なんでしょう？」

静かな哀しみを漂わせて、蘭が放った掠れた声にコナンは一瞬心の均衡を崩した。

「蘭ねえちゃん…そんな事ある訳無いじゃない。ボクは江戸川コナンだよ」

しつかりした声と隙の無い笑顔で返したコナンに、尚蘭は自分の考えを打ち明ける。

「わかってるの、非科学的だってことは…。でもね、そう考えたら辻褄が合うし—」

あなたの癖は新一に似すぎている。その言葉を叫ぶ前に、コナンが静かに遮った。

「辻褄？ 科学で証明できないのにそんなもの合う筈無いよ。蘭ねえちゃんが一人で誤解してるだけだ」

今までの静かさとは何処か違う冷たく、鋭い響きに、蘭は開きかけた口をキュツと結んだ。

「さあ、帰りなよ蘭ねえちゃん」

小学生が出すとは思えない、低い声。そして決定的に違っていたのはその少年が見せる表情だった。無表情でもない、当たり障りの無い笑顔を浮かべているわけでもない。その顔には、確かな皮肉めいた苛立ちの色さえ浮かんでいた。

「誤解？ あなたは新一よ！だって、私は小さいときから見てきた。細かな癖も、瞳の奥に映った苦しみも！！」

届かない想いに、蘭の視界は目まぐるしく回る。心に溜めた秘密が、どんどん膨らんで留まる事を知らずに流れ出した。胸のうちを吐き出した蘭に、コナンは笑いで肩を震わせた。

「…っははは！！蘭ねえちゃんに新一兄ちゃんの何がわかるの？」

感情の昂りを上手く押さえられないような、奇妙な声。今までに見たことの無いコナンに、蘭は動揺を隠せなかった。嘲り、と言うよりは本当に無邪気な笑いだ。

「コナンくん、おそなつてスマンな、すこーし工藤と会^あうとったさかいな」

突然の乱入者に、蘭は身体を震わせ、入り口を凝視した。関西弁で色黒の少年は、もちろん服部平次だ。コナンは腕組みをして、深い息を吐く。落ち着け、と自分に言い聞かせながら。

「服部くん！どうしてここに…ううん、それより、今新一に会ったって」

酸素不足の金魚のように口を何度も動かした蘭に、平次は余裕たっぷりで話しかけた。

「会ったで。今取り掛かつてる事件で何やら面倒なことになつとるらしくてな、知恵貸せって言われたんや」

蘭は冷静さを取り戻し、顔をしかめた。

「そんなはずはないわ、頼まれたんでしょう？そういう風に言ってくれ、って。ねえコナンくん。いいえ、新一！」

また矛先を自分に向けられ、コナンは指を結んで椅子に腰を掛けなおした。

「平次兄ちゃん、来てくれてありがとう。ちょっとボク、今大変で…。色々しなきゃいけないことがあるんだけど、とりあえず今は蘭ねえちゃんにボクと新一兄ちゃんが別人、って証明してあげてよ」

打って変わって思いつき子供らしい声で無邪気に言い放ったコナンに、蘭は茫然とする。そんな筈は無いのだ。新一の幼馴染とし

て、今まで共に居た日々を、偽りと言つ黒い色で染められたくは無かった。

「服部くん、お願い。正直に言つて」

蘭の瞳に浮かぶ涙に平次は目を瞑り、静かな、しかし説得力ある口調で告げた。

「正真正銘の、別人や。つい先刻まで俺は確かに工藤と会^あつたし、よく考えてみい、人間、そんな簡単に伸びたり縮んだりしたらえらい事やで？」工藤となかなか会えんから言つて、小学生相手に突っかかっても仕方ないやろ？…きつい事言つたかもしれんけど、堪忍な」

蘭の変化は、誰の目にも明らかだった。必死に言葉を探しても頭の切れる二人組に直ぐに紐解かれ、納得させられてしまう。蘭の瞳に浮かんだ絶望と悔し涙に、コナンは思わず目を背けた。

「―ごめんね、コナンくん。ちょっと頭冷やしてから来るね」

蘭が半ば駆け出すようにして工藤家から立ち去ると、平次は大きなため息と共にソファに腰を降ろした。コナンは、蘭の出で行った玄関を虚ろな目で見つめると、壁に拳骨を叩き付けた。

「工藤、あれで良かったんか」

ため息混じりに問いかけた平次に、コナンは心ここにあらず、という様子で答えた。

「ああ、仕方ねえさ。それより服部、今からここにもう一人の招か

れざる客を迎え入れる必要がある。隣の博士の家に行つててくれねーか？」

「招かれざる客で…まさか」

平次は慌てて閉め切られたカーテンの隅から顔を覗かせた。電柱の影に隠れるようにして煙草を燻らしている金髪に黒いコートの男。それはまさしく聞きしに勝るジンだった。

「真打ちのご登場だ」

白く曇った俯き気味の呟きに、平次は我に返る。まるで知っていたかのように悠々と構えるコナンに、平次は違和感を覚えた。

「何や、工藤、知つとったんか？あいつがおる事」

「蘭が来た時に見つけたさ。ずっと張り付いてたらしいな。ーこれは俺と奴の問題だ。服部は巻き込みたくねーんだ。頼むから、博士の家に行つててくれないか」

脂汗を浮かべたコナンの言い分に、平次の表情が一変した。荒々しく拳を机に叩きつける。

「一人であいつに会うんか？相手は武器持つとんやろ！俺じゃ頼りないゆうんか。一人で善人ぶって…自殺行為や」

明らかに怒気を含んだ乱暴な態度。コナンは柔らかい口調で諭した。

「バーロー、俺はオメーまで危険な目に遭う必要はない、って言うてんだ」

「それが余計はお世話や！水臭い事言っな。俺たちはライバルなんやろ？決着もつかんと先に死なれたら迷惑や！」

直ぐに切り返され、コナンは言葉に詰まる。言いくるめる術が無い事に洩々ながら肯き、ただ一言だけ、平次に言っに止めた。

「サンキュ、服部」

太陽が、沈もうとしていた。

一方、蘭は新一の家を飛び出したものの、コナンの態度に納得いかず、最後の手段に出ていた。

「阿笠博士なら、コナンさんの正体を知っているんでしょう？ 教えてください、お願いします」

深々と頭を下げる蘭に、博士は戸惑い気味に哀を見た。しかし、哀は博士の視線には応えず、じっと蘭に視線を向けていた。

「し、正体も何も、彼は江戸川コナンくん以外の何者でもないんじゃないよ」

大仰に手を振る博士は明らかに怪しく、蘭を諦めさせるには逆効果だった。

どう見ても彼の額には汗が浮かんでいたし、決定的だったのは目が泳いでいた事だ。

「蘭さんは、江戸川くんの正体を知ってどうしたいのかしら？ 万一、江戸川くんが工藤新一というあなたの幼馴染だったら？」

哀の言葉に、蘭は暫く考え込んでいた。博士は咎めるような視線を哀に送る。

「解らない。でも、許せないの。私を騙して、一緒に生活してたなら尚更。私を一体何だと思っていたのか、だって、あまりにも酷い扱いじゃない」

話しているうちに気持ちが昂ったのか、強い口調になった蘭に、哀は明らかに侮蔑の視線を投げ、蘭は大きく目を見開いた。小学生が向けられるような感情ではない事に、気付かざるを得なかった。そして、蘭の奥底に芽生えていたもうひとつの疑問が頭をもたげ、蘭を見返した。

「もしかして、哀ちゃんは―大人なの？」

無意識的に口を突いた言葉に、蘭自身も驚いていた。哀はそれを無視した。

「あなたには、何も知る価値が無いわ、彼の苦しみも、何にも解らないと思うから」

紅潮した顔でいつになくきつぱりと言い切った哀に、蘭は困惑した。哀の言う”彼”は、江戸川コナンの事なのか、それとも―

「あなたは自分にしか興味が無いの。一人にされたから、何の説明もなしに消えたから。全て、彼のせいにして、彼の事情を押し量ろうともしない。そんな人に、彼を支える事は出来ないわ」

「何を言っているの？」

蘭は解らないと言う風に眉を寄せ、小首を傾げた。哀は珍しく怒気をはらんだ口調で饒舌に話し続ける。先の一件が、彼女の中の何かを変えたのかもしれない。いや、本質を現しただけか。

「彼の背負っているものを、一緒に担ぐ覚悟があるか、って事よ」

何のことかわからないのに、どう答えると言うのか。蘭はますます

苛立ちを募らせた。

「いいわ、背負ってみせるわよ、どんな事でも」

きつぱりと啖呵を切った蘭に、哀の口元が緩んだ。

「覚悟があるなら――本人に聞くことね」

そういうと、スタスタと階段を降り、その不可思議な小さな少女は姿を消した。

「どうしちゃったのよ、哀ちゃんは……」

蘭は呆氣にとられる。今までの問答は一体何の意味があつたのか。蘭が博士に目をやると、彼にも戸惑いの表情が浮かんでいた。

「わしにもさつぱりじゃよ。とにかく、少し気持ちを落ち着けたらどうじゃ」

大体、その本人が蘭の欲しがる答えをくれないからここに来たのに。心中、蘭は悪態をつきながらも、博士に勧められるままにソファに腰を沈めた。

「蘭くん、しばらく彼らをそっとしておいてくれんか」

唐突に届いた博士の声に、蘭はハッと顔を上げた。普段温厚で、時には実験に失敗して新一と笑い合うようなひょうきんな顔を見せる彼が、今は何故か真剣な眼差しを蘭に向け、その顔には深く皺が刻まれていた。

「彼ら…」

「新一とコナンくんのことじゃよ。二人ともそれぞれ、心に大きな傷を抱えておるんじゃない」

蘭はじつと聞き入っていた。新一とコナンくんは、確かに一人なのに、どうしてそれを博士も、本人も認めたがらないのか、計りかねていた。そして、蘭は既に自分の仮説を捨て去る事は出来なかった。

「心の傷って何ですか？…私は、力になりたいです」

張り切る蘭の言葉に、博士は慌てて付け足した。

「君の力じゃ、どうにもならないんじゃないよ。だから、しばらくそっとしておいてくれんかの。今までのように。時が来たら全て明らかになるじやろうから」

蘭は一瞬不服そうな表情を浮かべたが、直ぐに優しく微笑むと、肯いた。

「新一が、真実を教えてくれるまで、待てばいいんですね」

ホッとしたように頷いた博士に蘭は一礼した。

「私、帰ります。コナンくんに変な事を言つてごめん、って伝えてください。あと、早く帰ってくるように、って」

蘭はチラリと階段下の哀の部屋に視線を向けた。そして、もう一度博士に一礼して帰っていった。

空は次第にオレンジ色を帯びた。コナンは平次の提案でしばらくはジンを挑発せずに相手の出方を待つ事にしていた。落ち着かないから、とコナンが淹れたコーヒーを平次に渡した時、一瞬彼がよろけたのを、平次は見逃さなかった。

「大丈夫か、工藤」

盆が床に落ち、紅い絨毯の上で小さな音を立てた。

「まだ、調子が悪いんとちゃうか？」

コナンは力なく首を振った。

「いや、そんなんじゃない、気にすんな」

柔らかい笑みを浮かべたその顔に平次は安心して口を閉じる。しかし次の瞬間、コナンは激しく咳き込んだ。

「ーごほっ……ごほっごほっ」

身体を二つに折るようにして大きく肩を上下させたコナンに、平次はコーヒークップを置いて駆け寄る。

「まだ入院しとった方が良かったんとちゃうか」

背中を擦る平次に、コナンはしわがれた声を出した。

「入院中身体が弱ってたから風邪引いたのかもしれないな。ここ数日身体がだるくてよ」

小さく愛想笑いを浮かべたコナンに平次が口を開きかけた時、部屋の入り口で誰かが乾いた笑い声を上げた。

「ククククッ…」

「ジン…」

コナンがたちまち表情を引き締めた。来訪者に背を向ける形になっていた平次は、急いで向きを変えた。

手には、拳銃が握られている。もちろん、コナンたちは何の武器も手にしていない。平次が顔色を変えた時、驚いた事にジンは銃口を下ろした。

「俺を殺しに来たんじゃないのか」

今や、コナンの顔は紅潮し、父親の敵に刺されと言わんばかりの物凄く殺気を出していた。

「こいつは殺させんぞ、俺のライバルや。そう簡単に死なんしな」

平次が頭の野球帽のつばを後ろに向けた。

「俺がわざわざ手を下す事はない。撃たれて死ぬより遥かに辛い死が、お前を飲み込もうとしているからな」

含みある口調で言い放つジンに、平次が憤怒の形相を浮かべた。

「どういうこっちゃ！言いたい事ははっきり言えや」

これ以上開きようが無いくらい、目を見開いた平次。そんな彼をよそに、コナンは再び咳き込む。

「けほっ…ごほ、ごほんっ…」

俺の身体は一体どうしてしまったんだ、心の中でコナンは自分を怒鳴りつけた。自覚症状は、数日前。不眠から始まった。疲れだと自分の中で区切りをつけていたのだが、このような形で表に出て、自分自身が一番驚いている。

「時の流れに人は逆らえないもの、それを無理矢理ねじ曲げようとするれば人は罰を受ける…」

ジンが呟いた言葉に、コナンは口を押さえていた手を下に降ろした。

「それは、灰原が言っていた言葉じゃねーか」

「捻じ曲げたのは薬を作り出したちっさいねえちゃんと、工藤にそのあほときしんとやらをのませたあんたやる」

平次の理屈に、ジンは明らかに瞳に敵意を浮かべて冷笑した。

「後は自分達で考えるんだな、工藤新一。俺はお前の死を見届けてやる」

ジンが立ち去った後、二人は呆然と立ち尽くしていた。ジンの言った事の意味を必死で推し量ろうとする平次、そしてコナンは立っていられずにその場にしゃがみこんだ。その瞳は彼自身の心を映し出すかのように揺れ動いていた。

コナンの前に、かつて無いほど大きな危機が迫っていた。果たして、その運命は如何に。ジンの発した言葉の意味、そしてコナンと蘭の行方は――

FILE・23 残された謎（後書き）

第一部を完結させました。

80分越える作品を始めた執筆し、
毎日奮闘してました。

第二部のタイトルは『悲壮の狂死曲』

次はここまで長くは書かないと思いますが、
結構ダークに仕上げるつもりです。

評価くださった先生、読んで下さったあなた、
ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3444c/>

流血の終焉

2010年10月10日14時21分発行